ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第91号

共同研究　丹後地方弥生墳墓における祭祀行為について ---------- 石崎　善久 -- 1
—墳墓祭祀からみた赤坂今井墳丘墓—

平成15年度発掘調査略報 ---------- 13

7．今井古墳
8．大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡
9．岡ノ遺跡第２次
10．観音寺遺跡
11．池上遺跡第17次
12．河原尻遺跡
13．高梨遺跡第３次
14．長岡京跡右京第787次・友岡遺跡
15．内里八丁遺跡第20次
16．片山遺跡第２次

資料紹介　天王山古墳群Ｂ支群１号墳経塚 ---------- 森島　康雄・村田　和弘 -- 27

長岡京跡調査だより・88 ---------- 31

センターの動向 ---------- 33

2004年３月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

共　同　研　究

丹後地方弥生墳墓における祭祀行為について
—墳墓祭祀からみた赤坂今井(あかさかいまい)墳丘墓—

石崎　善久

1．はじめに

赤坂今井墳丘墓[注1]は、京都府峰山町字赤坂小字今井・ケビに所在する。赤坂今井墳丘墓の所在する地点は京都府北部、丹後半島の小河川である竹野川の支流の丘陵先端部に造墓されている。これまで６次に及ぶ発掘調査がなされ、１辺約40mの主丘部に幅約５mのテラスが周辺をめぐる構造を持つ丹後地域でも最大規模の弥生墳墓であることが明らかとなった。

特に第３次調査では、中心主体である第1主体部の墓壙内の調査、および近接する第４主体部の墓壙内・棺内調査が実施され第４主体部からは、ガラス製管玉・碧玉製管玉・ガラス製勾玉を使用した頭飾りが検出された。

今回は赤坂今井墳丘墓を中心に弥生墳墓で行われた儀礼について検討を行うことにより、赤坂今井墳丘墓の特質の一面を考察してみたい。埋葬儀礼は近藤義郎氏の説くように弥生時代の首長の存在、あるいは首長権の継承に深く関連するものである[注2]。また、儀礼の変化が起こる要因として、内部的・外部的な影響を考えることも可能である。とはいえ、具体的に祭祀の風景を復原することは考古学的手法からは限界がある。ここでは、墓壙に関連して行われた祭祀行為(の結果残された遺構・遺物)、墳丘で行われた祭祀行為(の結果、残された遺構・遺物)を整理し、他地域との比較検討を行うことにより、この墳墓の性格を考えてみたい。

なお、本論攷は当調査研究センター平成13・14年度共同研究「赤坂今井墳丘墓と日本海域の墓制」の成果として執筆・作成したものである。

2．赤坂今井墳丘墓における祭祀行為

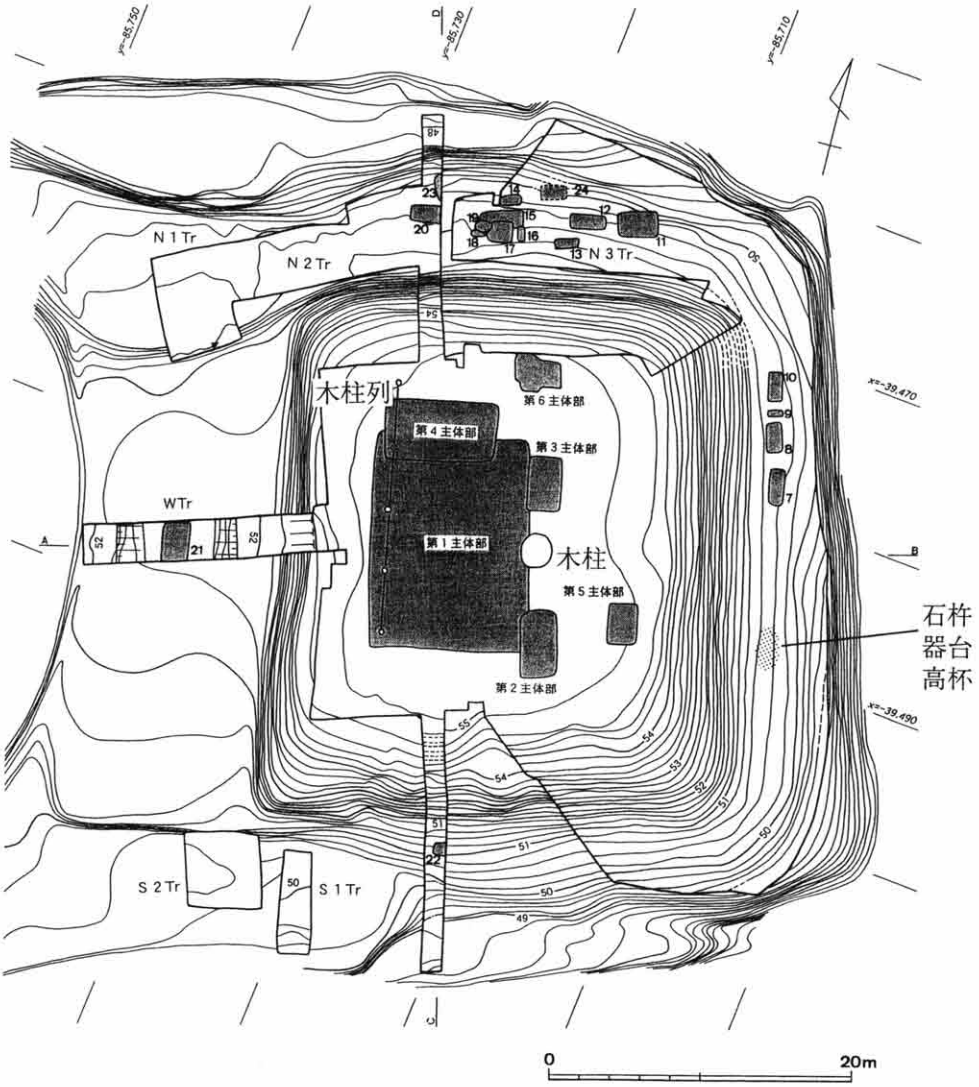
赤坂今井墳丘墓(第１・２図)における祭祀行為は、墓壙内(棺内)、墓壙上、墳丘上の祭祀行為に分類される。なお、第１主体部の調査は木棺の痕跡と考えられる土色変化を確認した段階で終了しているため墓壙内破砕供献土器の存在については不明である。

第１主体部における祭祀で特徴的なものが、ピット群の存在である。これらピット群は第１主体部の西側、木棺に主軸を同一にし計４か所で確認された。ほぼ心々間４m等間隔で掘削されていることから、本来、第４主体部構築前の第１主体部墓壙上にも存在していたと判断されるが、第４主体部の構築に伴い破壊されたものとみられる。この点からみてこれらピット群は第１主体部埋め戻し直後に掘削され、第４主体部構築時には機能を失っているものと考えられる。明確な

柱痕をもつものはないが、その規模からみて木柱が立てられていたと考える。また、Ｐ１・３の埋土中から弥生土器片が出土していることから、墓壙上の土器を用いた祭祀行為の終了後には木柱は取り除かれ埋め戻されたものと考えたい。

墳丘中央には第１主体部墓壙東辺中央を切って直径約２ｍ、深さ1.5ｍの円形素掘りの土坑が掘削されている。この土坑について、第２次調査段階では上層の中世山城に伴うものと判断されたが、掘削面が盛土面から掘り込まれていることや、掘削位置が第１主体部墓壙東辺の中央、西側柱穴列Ｐ２・３の中央に計画的に配置されていること、墓壙をわずかに切り込むように掘削されていることから、積極的に山城造成時の遺構として評価することは困難であり、第１主体部に対し計画的に掘削された土坑であると判断する。掘削時期は第１主体部埋め戻し後であり、先述のような計画性を持つことから木柱列と同時期に掘削されたと考える。土坑は底部に木柱の圧痕もしくは腐植痕と思われる土色の変化が確認されており、大型の木柱が立てられていたと判断される。木柱列とは異なり、埋葬終了後も木柱が存在していたと考える。

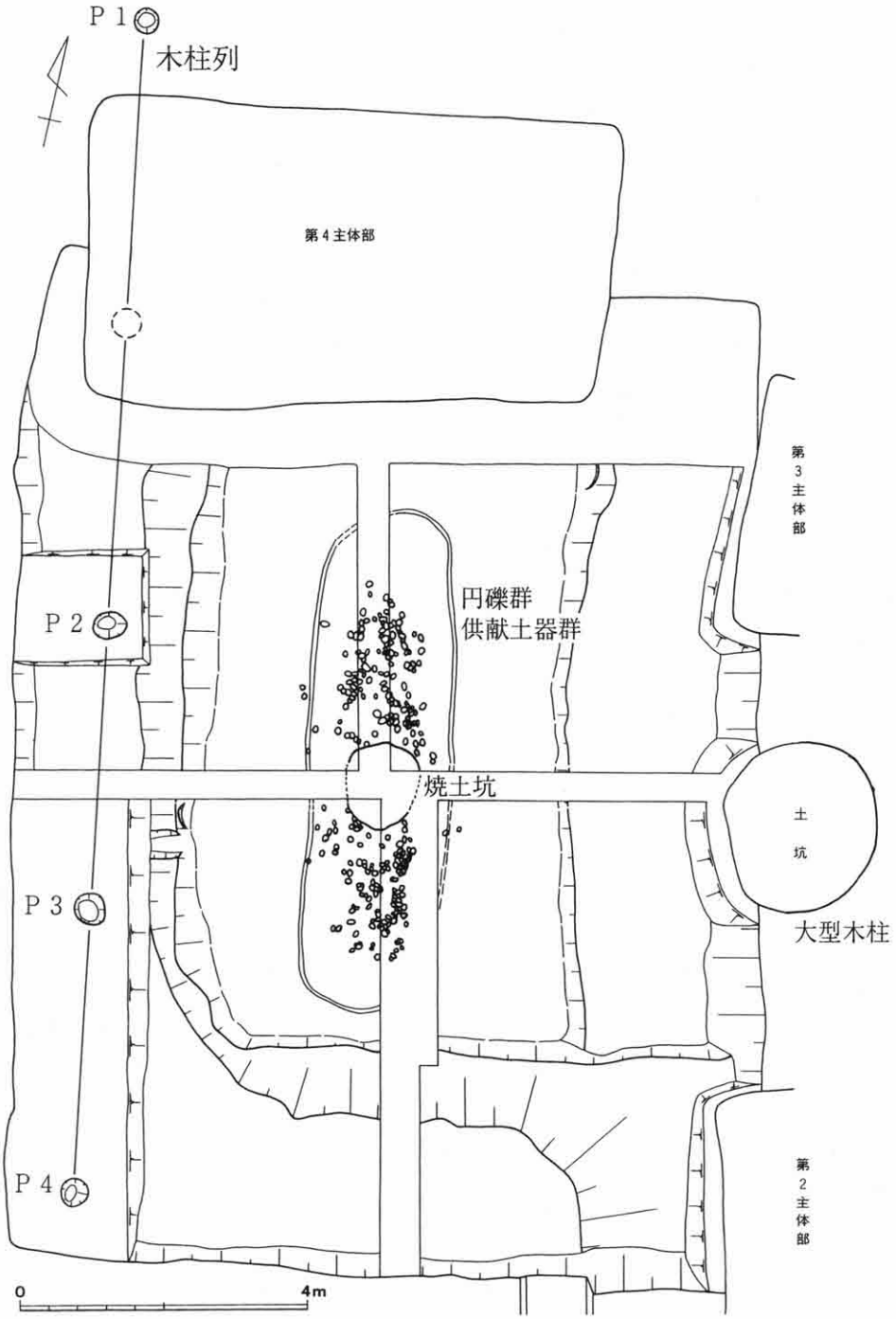
円礫の敷設行為、土器の破砕供献儀礼は第４主体部と同様であり、円礫は墓壙中央の木棺相当



第１図　赤坂今井墳丘墓全体図

部分直上の南北5.3m、東西1.2m程度の範囲に敷設される。密度はほぼ均一であり、ややまばらな印象をうける。出土土器との位置関係から土器供献以前に円礫が敷設されたものと判断される。

墓壙上の供献土器には完形個体が認められず接合作業を行っても完形個体に復原されるものは存在しない。また、土器の大部分を失っているものが多く、儀礼終了後、削平やさまざまな理由により移動したと考えても余りにも復原率が悪い。こうした状況からみて概要報告で第４主体部に対し検討を行ったように、墓壙上に破砕した土器を供献したものと判断する。また、特殊な遺



第２図　赤坂今井墳丘墓第１主体部墓壙上の祭祀関連遺構

物として辰砂が土器とともに供献されている。

墓壙上に形成された木棺腐朽に伴う陥没痕を切り込んで直径約1.1m、深さ0.7mの円形土坑が掘削されている。土坑は陥没痕の中央ではなく、墓壙の中心に掘削されている点が注目される。この土坑は壁面が焼けており、土坑内部で火が焚かれたものとみられる。土坑の掘削時期については木棺の腐朽後陥没痕が形成され、陥没痕内が周辺からの流入土により一定程度埋没した段階に掘削されたものと土層断面の観察結果から判断する。第１主体部の木棺の腐朽にはどの程度の期間がかかるのか明確にはし難いが、かつての近世土葬墓では７～13年程度で木棺が腐朽し陥没するという。この点からみて、陥没痕形成には10年前後の期間が必要であったと考えられる。陥没痕が形成されてから一定程度埋没するにはさらに数年が必要であろうから、感覚的なものではあるが20年弱の期間が経ってから土坑が掘削され、火が焚かれたものと考えたい。以上の諸点からこの土坑は後世全く無関係に掘削されたものではなく、第１主体部に対し行われた追善供養的な儀礼に伴う土坑であると考えたい。

主体部に直接関連する祭祀行為ではないものの、周辺東テラス南側でみられる埋葬施設の存在しない空間から石杵・高杯・壺などが検出されており、主丘外での祭祀空間として認識することが可能と考える。出土した器台・高杯は大型品であり第1主体部との共通点を指摘できる。

以上、赤坂今井墳丘墓第１主体部で行われた祭祀行為を中心に概観してきた。その結果、時間的にみれば、以下の４段階の祭祀行為が行われていると整理できる。

(1)被葬者の安置に伴う副葬品の配置行為(推定)

(2)墓壙埋め戻し後の祭祀行為(ａ．木製樹立物、ｂ．円礫敷設、ｃ．破砕土器・辰砂供献儀礼)

(3)第１主体部埋葬儀礼終了後一定時間をおいた土坑掘削および火焚き行為

(4)主丘外における石杵・土器を使用した祭祀行為

このうち１～３については第１主体部被葬者という特定個人に対して実施された儀礼であるといえるが、４についてはその対象が特定個人ではなく、墳丘墓被葬者群全体を対象として行われた可能性がある。また実施された時期についても明確にしえないが、大型品を使用している点から第１主体部の埋葬時に伴うものである可能性が高い。

近接する第４主体部では１と２の間に墓壙内破砕土器供献儀礼が追加され、２ａおよび３が認められず第１主体部より簡略化されたものといえる。

第１主体部の被葬者の死亡から追善供養と考えられる焼土坑の形成までの儀礼は第３図に示すように整理される。福田聖氏は関東の方形周溝墓における供献土器のあり方から死者儀礼の段階を民族学・人類学の立場から整理され、方形周溝墓周溝内供献土器を死者の葬送儀礼と浄化儀礼に使用されたものと考えられている。(注3) 精神的な世界を完全に復原することは不可能と思われるが、非常に興味深い論攷である。氏の検討結果に赤坂今井墳丘墓の葬送儀礼を当てはめてみると第３図のような時間経過に沿った祭祀の状況が復原できる。氏の説に従うならば墓壙上で確認された焼土坑は浄化儀礼に伴う祭祀と見ることができよう。

以上のように赤坂今井墳丘墓第１主体部における墓上祭祀は、他の墳墓に比べても複雑であり、

被葬者の死に際し複雑な儀礼が必要であったことを物語っている。こうした状況から見ても第1主体部被葬者のもつ社会的特殊性を強調したい。先程の福田氏の理論に当てはめるなら、首長を浄化儀礼により特別な観念的存在にすることにより、新たな安定した秩序を再生産したということになろう。

3．丹後地方における弥生墳墓の祭祀行為

丹後地方の弥生後期から古墳時代前期初頭を中心とした墳墓における祭祀行為は以下の各段階で各種が認められる。

(1)遺骸の安置　　a．副葬品の配置・b．土器供献

(2)棺蓋設置　　a．土器供献

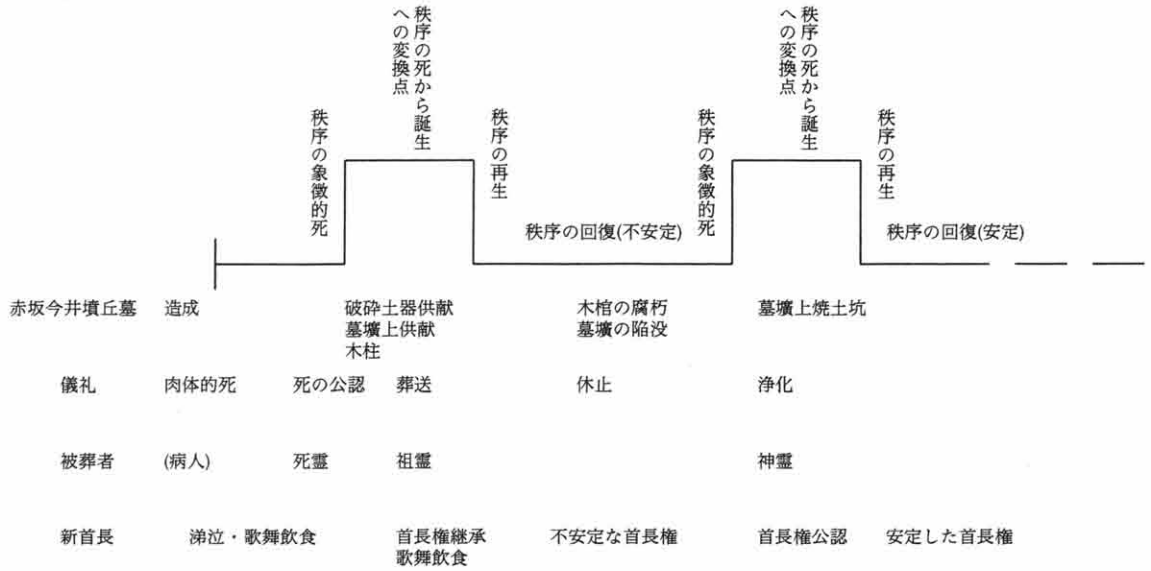
(3)墓壙埋め戻し後　a．木製樹立物の設置、b．円礫敷設、c．土器供献、．鉄器供献、
　　e．辰砂供献、f．火焚き行為

(4)墳丘外祭祀　　各種の遺物供献行為　a．土器、b．鉄器、c．石杵

上述したすべての行為が普遍的に行われているわけではなく、これらの行為が組み合わされて葬送儀礼を形成しているといえる。

副葬品配置については、丹後の弥生墳墓で出土する鉄製武器、特に鉄剣のうち、棺内に収められたものには刀装具が装着されているものが少なく、抜き身もしくは布巻の状態で収められているものが多い。この状況は実際の佩用品として鉄剣が使用されているのではなく、祭祀的な意味を込めて収められている可能性が高い。鉇については福島孝行氏の論攷(注4)に詳しいが、配置状況に一定の原則が認められる点からみてもやはり祭具として用いられ、伝統的に葬送儀礼の中に組み込まれたとみるのが妥当である。

墓壙内破砕土器供献は肥後弘幸氏により整理・検討(注5)がなされている。氏によれば、この儀礼は



第3図　赤坂今井墳丘墓第1主体部の死者儀礼

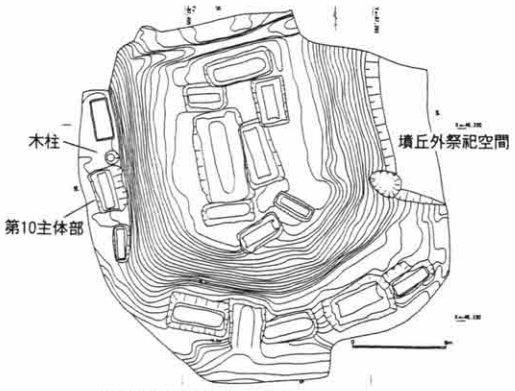
中期末に完成し、後期中葉に器種構成が変化する。すなわち、調理容器のみが墓壙内に破砕供献され、飲食容器は墓壙上に破砕供献されるようになる。終末期になると墓壙内破砕土器供献の出現率が低下し、墓壙内破砕土器供献を行わない墳墓が誕生する。また、墓壙上の土器供献は中心埋葬施設のみでの儀礼と変化しているようである、との見解を示している。後期末の墳墓として、浅後谷南墳墓[注6]と金谷１号墓[注7]の事例をあげてみると、浅後谷南墳墓では９基の主体部中８基から墓壙内破砕土器供献が確認され、中心主体である第１主体部では墓壙上の土器供献儀礼も行われている。一方、金谷１号墓では土器棺墓を除く全16基の主体部中墓壙内での土器供献を行うものが５基、墓壙上面での土器などの供献を行うものが５基とほぼ同数であり、両者を併用する主体部はない。時期的に後出する白米山北古墳[注8]では３基の主体部のうち供献土器をもつものはなく、墳丘内の礫敷遺構上で土器・鉄器を用いた祭祀が執り行われている。赤坂今井墳丘墓では調査された11基の木棺墓の内、墓壙内土器供献儀礼を行うものはわずかに３例にとどまっている。

墓壙内破砕土器供献に変わって後期末以降顕在化するのが墓壙上における供献儀礼である。墓壙上には土器以外にもさまざまなものが供献されている。赤坂今井墳丘墓第１主体部墓壙上では辰砂が検出されている。内和田２号墳[注9]では庄内新段階併行と考えうる墓壙上の破砕土器とともに銅鏃が出土している。墓壙上の鉄鏃などの供献儀礼は金谷１号墓第10・15主体部にもみられる。太田４号墳下層土坑ＳＸ01[注10]では破損した鉄剣を多数の完形品の土器とともに供献していた。墓壙内での土器を用いた儀礼以上に、墓壙上での儀礼が多様化しているものと判断される。

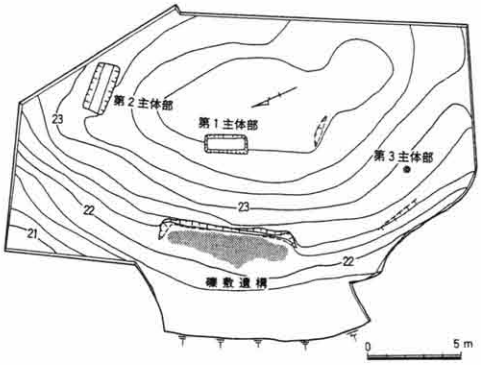
後期中葉段階に確立・定型化した墓壙内破砕土器供献儀礼は後期後半から末にかけて普遍性を失い、墓壙上祭祀の顕在化を経て、左坂Ｇ13号墳[注11]や北谷１号墳[注12]には完形品の土器を供献する段階へと移り変わる。器種の構成は肥後氏の指摘するように、後期中葉段階に分離した煮沸具と供膳具のうち、基本的に供膳具のみが葬送儀礼の中に残されている。

赤坂今井墳丘墓の特徴的な施設として木柱を立てたと思われるピットの存在がある。丹後地域では類例として、金谷１号墓第10主体部、および左坂墳墓群Ｇ１号墳下層第９主体部[注13]、野田川町西谷２号墓[注14]をあげることができる。金谷１号墓第10主体部では北側に直径約60cmの円形土坑が掘削されている。第10主体部は墓壙上面に鉄製品を並べて供献する特殊な主体部であり、この円形土坑も第10主体部に伴う木製樹立物が存在したと考えられる。左坂墳墓群Ｇ１号墳下層第９主体では変則的な二段墓壙の肩部から２基のピットが検出されている。故意に墓壙にステップを削り残し、この平坦面上からピットを掘り込んでいることから、墓壙掘削段階もしくは木棺設置段階で掘削されたものとみられる。この２基のピットに木柱が据えられていたと考えた場合、墓壙を完全に埋め戻す以前の段階での祭祀行為に関連すると判断される。可能性としては墓壙内破砕土器供献儀礼時に木柱が樹立されていたと思われ、赤坂今井墳丘墓の事例や金谷１号墓第10主体部など墓壙上の祭祀に伴うものとは様相が異なる。時期的にも後期前半段階の墳墓であり、丹後地域における木製樹立物の採用を考える上で貴重な資料である。野田川町西谷２号墓では主体部に近接して２基の平面長方形の小土坑が検出されている。調査担当者は、木製の祭壇状の構造物が存在した可能性を考えておられる。この土坑のうち１基には赤色顔料を入れた壺が埋納されてお

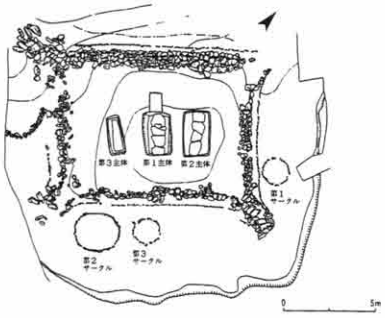
り、墓壙上での祭祀終了後、この施設は取り壊され、祭祀に使用した土器類を埋納もしくは並べおいたものと見られる。祭壇か否かは議論の別れるところではあるが、墓壙上で実施される木製樹立物を用いた祭祀の一例として注目される事例であり、埋葬終了後に取り壊されるという点に



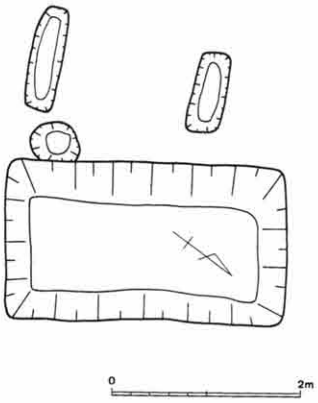
1．京都府峰山町金谷１号墓



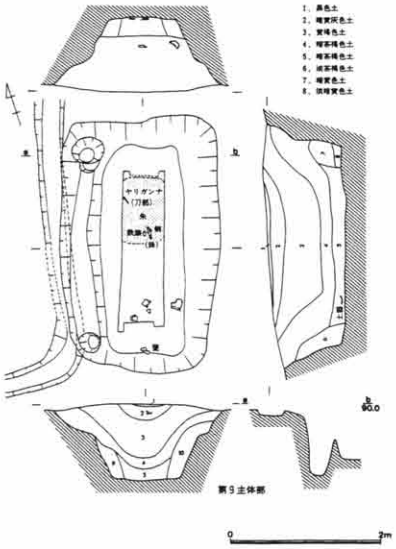
2．京都府加悦町白米山北古墳



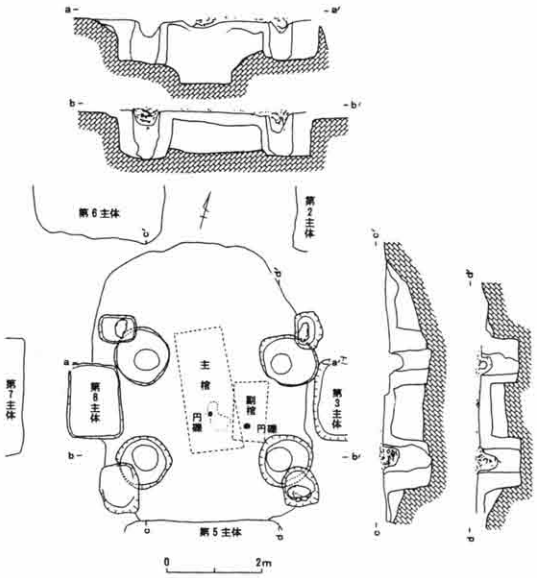
3．島根県瑞穂町順庵原１号墓



4．京都府野田川町西谷２号墓



5．京都府大宮町左坂Ｇ１号下層第９主体部



6．島根県出雲市西谷３号墓第４主体部

第４図　関連遺構実測図

おいても赤坂今井墳丘墓木柱列と共通性をもつ。一方、赤坂今井墳丘墓の大形木柱や、金谷１号墓の木柱は埋葬終了後にも樹立していた可能性が高い。墓壙上の祭祀行為が多様化していることを物語る事例であり、木製樹立物そのものの用途や性格にも差が生じていたとみることができよう。

墓壙上面に円礫が敷設されるものは類例が少ない。丹後における初見は大風呂南１号墓[注15]であり、現在、赤坂今井墳丘墓と併せて２墳墓でのみ確認され、大型弥生墳墓に採用されている施設と考える。いずれの事例も海岸部に存在する円礫を用いている。

墳丘外の祭祀施設については、金谷１号墓と白米山北古墳を丹後の事例としてあげることができる。金谷１号墓では、墳丘東裾部に地山削り出しと一部盛土を併用して作られたテラス上の施設から壺・高杯などが出土した。土器を用いた供献儀礼が行われたものと考える。白米山北古墳では礫敷を施した平坦面が墳丘西裾付近に設けられている。土器のほか鉄鏃が使用されている。河野一隆氏はこの場での儀礼を復原し、中心主体部に伴う儀礼行為が実施されたものとして位置づけている。赤坂今井墳丘墓では土器に加え石杵が使用されている。また、赤坂今井墳丘墓の墳丘外祭祀空間から出土している土器は大型品であり、白米山北古墳同様、第１主体部に伴い実施された祭祀である可能性が高い。これら、墓壙上土器供献を除く墓壙埋め戻し後における多種多様な祭祀のあり方は、弥生時代後期中葉の大風呂南１号墓第１主体部の円礫敷設行為や、古天皇５号墓第１主体部墓壙上の火焚き行為に初現を発し、後期末葉に多様化を迎えるものといえる。この状況は、舟底状木棺の出現とともに弥生時代後期中葉段階に墳墓祭祀に大きな画期があったことを示しているものと考える。

４．他地域の弥生墳墓における葬送儀礼

以上、赤坂今井墳丘墓を中心に、丹後地域の弥生墳墓における祭祀のあり方を概観してきた。その結果、肥後弘幸氏の指摘するとおり弥生時代後期前半以降普遍化してきた墓壙内破砕土器供献儀礼は後期末葉にいたって必ずしも普遍化した儀礼ではなく造墓集団により取捨選択されてきたものとみられる点を確認した。また、墓壙上面における祭祀行為は後期末葉に広く普及し、特殊な主体部を対象として実施されるものと考えた。

赤坂今井墳丘墓にみられるさまざまな祭祀に伴う痕跡の意義を今一度確認し、他地域の弥生墳墓との比較を行っておきたい。

木製樹立物の存在については小池寛氏が古墳時代の例についてまとめている[注16]。氏の論攷「古墳における木柱の樹立について」において、以下のように木柱樹立概念の分類を行っている。

(1)墳丘周囲にめぐる事例... 聖域との区画としての樹立物

(2)複数あるいは単独で墳頂部およびその周辺に樹立される例... 象徴的な樹立物(例えば亡き祖霊の依代)

(3)前２者に属さない特殊事例... 墳墓の正面観の表現

氏の論攷は古墳における木製樹立物に対する考察であり、弥生墳墓における事例を単純に当てはめることはできないが、赤坂今井墳丘墓の場合は(2)の事例に相当し、第１主体部の葬送儀礼

に伴い象徴的な樹立物が使用されたことを示している。木製樹立物には墓壙上の祭祀終了後、時を経ずして取り壊される小規模なものと、埋葬終了後もその場に樹立させられた大型木柱の２種が認められ、それぞれ異なる性格が与えられたものとみられる。

墳丘上の樹立物を有する他地域の事例として、島根県西谷３号墓[注17]と、岡山県楯築弥生墳丘墓[注18]を挙げておきたい。西谷３号墓の場合、中心主体と考えられる第４主体部墓壙埋め戻し後に４本の柱を立てている。各々の柱には副柱と考えられる構造物があり、上屋構造をもつ遺構が推定されている。そのほかの土器や、石杵の可能性のある円礫などの使用状況は同墳墓の第１主体部と共通しており、第４主体部との葬送儀礼の中での格差は墓壙上の上屋構造のみとみられる。ただし、この主柱穴に立てられた木柱は短期間の内に除去されたものとみられており、やはり儀礼を行う間のみ必要な施設であったと解される。西谷３号墓第４主体部では吉備の特殊壺・特殊器台が使用され、また、北陸・北近畿系とされるものも存在する。楯築弥生墳丘墓の場合、樹立時期について詳細の不明な点は残るものの、巨石を墳丘上に樹立していた可能性が考えられる。仮に巨石が建てられていたと考えた場合、楯築弥生墳丘墓では恒久的な施設として立石が存在したこととなる。この状況は赤坂今井墳丘墓に見られる大型木柱の存在との共通点を窺うことができよう。

墓壙上の円礫群は丹後の伝統的弥生墳墓の中から出現したとは考え難く、また、小規模な墳墓での検出例がないことから他地域の影響下で特殊な墳墓に採用された施設と思われる。

墓壙上に礫を置く墳墓の類例は大谷晃二氏の集成[注19]によると、44例が知られ、これに大風呂南墳墓群、赤坂今井墳丘墓例を加えると46例となる。氏は墓壙上礫群をＡ～Ｄの４類に分類し、瀬戸内（Ａ・Ｂ）と山陰（Ｃ類）に地域的な偏在性があると述べられた。

丹後における墓壙上礫群のありかたは３例とも氏の分類のＢ類に相当する。Ｂ類は瀬戸内から中国山間部にかけて分布の中心をもつ。なお、丹後半島には中期以来の伝統的な礫の使用法として墓壙上面に標石を置く例が奈具墳墓群[注20]などで確認されているが後期初頭のものを最後に断絶するようであり、礫群の使用は外部的な要素といえる。大谷氏の集成から、墓壙上礫群の採用は瀬戸内から中国山間部との交流の結果採用されたものといえる。その時期は現在のところ後期中葉に位置づけられる大風呂南１号墓第１主体部から開始され、赤坂今井にも引き継がれた要素としてみることができる。畿内中央部における弥生後期の墓制については不明な点が多く比較検討する資料がない。やや時期は下るがホケノ山古墳[注21]では、石組木槨墓の墓壙上に大形の礫を積み上げ、底部穿孔した二重口縁壺を供献した状況が復原されており、礫の使用状況はＡ類に相当する。墓壙上祭祀に礫を用いる事例が地域を越えて共有されていると言うことができよう。

石杵を用いる供献儀礼の形態は山陰から北陸まで広範に分布し、山陰の事例として西谷３号墓、北陸の事例として福井県小羽山30号墓[注22]が挙げられる。これらはいずれも墓壙上に置かれたものであり、墓壙上祭祀に伴う遺物である。丹後の場合、確認されるものは赤坂今井墳丘墓の１例のみであり、使用状況も墳丘外の祭祀空間で供献されており様相を異にするが、朱を精製する道具である石杵が墳墓祭祀に採用されている点は他地域からの影響をみることができる。

主丘外における祭祀行為は島根県順庵原１号墓[注23]などでサークルストーン状の遺構が確認されて

おり、主丘外での祭祀が行われていたことを示している。楯築弥生墳丘墓をはじめとする吉備の突出部をもつ墳丘墓では突出部における祭祀が顕著であり、特殊器台・特殊壺のセットと共に墳丘墓祭祀の主要な要素を形成している。山陰における四隅突出墓でも突出部の祭祀が盛行し、阿弥大寺墳墓群[注24]などで突出部での土器供献儀礼が実施されている。このように突出部をもつ山陽・山陰の弥生後期墳墓では、主丘外での祭祀が盛んに行われているのに対し、丹後では墓壙単位での祭祀が主体的であり、主丘外での祭祀を行う例は少ない。このような状況から見れば、丹後の主丘外祭祀も外的な影響の下に出現したと考える。

墓壙上の供献土器のあり方については、西谷３号墓では多数の土器の出土した第１・第４主体部とも完形に近い土器が置かれており墓壙上祭祀の終了後にまとめて置かれたものと考えられている。器種の組成は壺・高杯・器台・低脚杯など供膳具により構成され煮沸具を含まない。楯築弥生墳丘墓においても中心主体の墓壙上から出土する土器は供膳具により構成されている。丹後における墓壙上の供献土器のあり方も肥後氏の指摘するとおり煮沸具は姿を消し、供膳具のみのセットになる。このあり方もまた他地域と歩調をそろえた結果であると考えられる。

５．ま と め

以上、赤坂今井墳丘墓における祭祀行為は在地的発展を遂げ成立したものよりも外的な影響から出現したものが多いと考えられた。この中でも前代の墳墓祭祀からの系譜を追うことができるものである円礫の敷設行為は一般的なものではなく、特殊な大型墳墓に限定されるものとみられる。木柱の樹立行為については、左坂Ｇ１号墳下層第９主体部が後期前半の資料として注目されるが、後期末葉までには空白期が存在するため直接的な系譜が追えるかどうか判断できない。木柱の樹立行為については今後意識的な調査の実施により類例が増加することが予測されるため、その系譜については今後の課題としておきたい。

丹後弥生墳墓の祭祀行為は、墓壙内破砕土器供献儀礼を中心としたいういわば閉鎖された空間で少人数により実施される祭祀から、墓壙上への土器供献儀礼という多数の目前で行われる儀礼へと変化し、その際の視覚的な象徴物として木製樹立物の採用が行われたと推測する。この祭祀行為のもつ性格の変化が墳墓の形態の変化を強く規制しているものと考えたい。赤坂今井墳丘墓・金谷１号墓・浅後谷南墳墓など丹後を代表する弥生後期末の墳墓では中心的な主体部が平坦面中央に位置せず偏って位置するものが大多数である。これを祭祀の側面から捉えれば、より多数の参加者が祭祀に参加する必要性から墳頂部における空間確保のため必然的に偏って作られたとみることが可能である。葬送儀礼に参加する人数の増加に伴い、墳頂部にはそれを収容する機能が求められたのではないかと考える。

墓壙内破砕土器供献という共通した祭祀をもつ丹後を中心とした北近畿地域は、山陰から北陸にかけて広範囲に分布する四隅突出墓の欠落する地域であり、平面方形あるいは、丘陵稜線に階段状の地形を削り出し墓域とするなど共通した墓制を有する地域である。また、後期末において中核的な墳墓には、舟底状木棺の採用、鉄製武器を主体とする鉄器の副葬行為、方形墳丘の採用

など強い共通性が認められ、政治的なまとまりを有していたものと考えてきた。(注25)

一方、墓壙上において執行される土器を主体とした共飲共食儀礼は地域を越えて存在する。墓壙内破砕土器供献が在地的な葬送儀礼に伴う祭祀行為であるのに対し、墓壙上で執り行われる共飲共食儀礼は笵西日本的な儀礼として認められるものであり、墓壙内破砕土器供献の減少はこうした外部的な要素の採用によって進行したと考えたい。

これまで概観してきたように、赤坂今井墳丘墓にみられる多種多様な祭祀のあり方や、儀礼の背後に存在する死者に対する思想的背景は地域的な垣根を越え、笵日本的に歩調を合わせるように進行してきたものとみられる。伝統的墓壙内破砕土器供献の衰退は、葬送儀礼において外的な影響下に成立する祭祀行為が重要性を増していることに起因し、その背景には鉄器の流通拠点(注26)として外部との交流を深めていった丹後の首長が対外的にもそうした祭祀自体を採用する必然性があったことを物語るのではなかろうか。

以上のように、ともすればその独自性のみが強調され、閉鎖的・排他的にみられる丹後地域の弥生墳墓であるが、墳墓のもつ本質的な性格は西日本各地の大型墳墓と連動しており、丹後地域もそういった情報を積極的に吸収していったであろう点を強調して結びとしたい。

なお、本論は赤坂今井墳丘墓のもつ一要素を不十分ながら概観したに過ぎず、今後ともほかの視点からこの大型墳丘墓成立の背景について考察を行っていきたい。

(いしざき・よしひさ＝当センター調査第２課調査第１係調査員)

注１　黒坪一樹・石崎善久「赤坂今井墳丘墓・今井城跡・今井古墳発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第92冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2000
石崎善久・岡林峰夫ほか「赤坂今井墳丘墓第３次発掘調査概要報告」(『京都府遺跡調査概報』第100冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2001

注２　近藤義郎『前方後円墳の時代』(岩波書店)　1983

注３　福田聖「方形周溝墓と儀礼－鍛冶谷・新田口遺跡第12号方形周溝墓の死者儀礼」(『埼玉考古学論集』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団)　1991

注４　福島孝行「弥生墳墓における鉋の副葬作法について」(１～３)(『京都府埋蔵文化財情報』第78～80号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2000

注５　肥後弘幸「墓壙内破砕土器供献(近畿北部弥生墳墓土器供献の一様相)」(上・下)(『みずほ』12・13　大和弥生文化の会)　1994
肥後弘幸「弥生墳墓における土器供献－丹後の場合－」(『YAY！　弥生土器を語る会20回到達記念論文集』　弥生土器を語る会)　1996
肥後弘幸「近畿北部(丹後・丹波・但馬)の墓制」(『季刊考古学』67　雄山閣出版)1999

注６　竹原一彦「浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓」(『京都府遺跡調査概報』第84冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1998

注７　石崎善久「金谷古墳群(１号墓)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第66冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1995

注８　河野一隆「白米山北古墳」(『京都府遺跡調査概報』第57冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センタ

ー）　1994
注９　森正「内和田古墳群」（『京都府遺跡調査概報』第49冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1992
注10　増田孝彦「大田・下後古墳群」（『京都府遺跡調査概報』第39冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1990
注11　石崎善久「左坂古墳群」（『京都府遺跡調査概報』第60冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1994
注12　田代弘「北谷古墳群」（『京都府遺跡調査概報』第65冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1995
注13　今田昇一ほか「左坂古墳（墳墓）群Ｇ支群」（『京都府大宮町文化財調査報告』第20集　大宮町教育委員会）　2001
注14　西谷墳墓群については、野田川町教育委員会下川賢司氏より資料の提供を受けた。
注15　白数真也ほか「大風呂南墳墓群」（『岩滝町文化財調査報告書』第15集　岩滝町教育委員会）　2000
注16　小池寛「古墳における木柱の樹立について」（『京都府埋蔵文化財情報』第41号　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1991
注17　渡辺貞幸「弥生墳丘墓における墓上の祭儀－西谷３号墓の調査から－」（『島根県考古学会誌』第10集　島根県考古学会）　1993
渡辺貞幸1992　「西谷墳墓群の調査（Ｉ）」（『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』　島根大学法文学部考古学研究室）　1992
注18　近藤義郎ほか『楯築弥生墳丘墓の研究』（楯築刊行会）　1992
注19　大谷晃二「弥生墳丘墓における主体部上の祭祀の一形態」（『矢藤治山弥生墳丘墓』　矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団）　1995
注20　河野一隆「奈具墳墓群・奈具古墳群」（『京都府遺跡調査概報』第65冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1995
注21　橿原考古学研究所編『ホケノ山古墳調査概報』（学生社）　2001
注22　古川登「北陸地方の四隅突出型墳丘墓について」（『島根考古学会誌』第10集　島根考古学会）　1993
注23　門脇俊彦「順庵原一号墳について」（『島根県文化財調査報告』第７集　島根県教育委員会）　1971
注24　真田廣幸ほか『上米積遺跡群発掘調査報告Ⅱ』（倉吉市教育委員会）　1981
注25　石崎善久「舟底状木棺考－丹後の刳抜式木棺－」（『京都府埋蔵文化財論集』第４集　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2001
注26　野島永「弥生時代の対外交易と流通－弥生墳墓の副葬鉄器を通して－」（広瀬和雄編『丹後の弥生王墓と巨大古墳』　雄山閣）　2000
野島永「鉄器からみた諸変革－初期国家形成期における鉄器流通の様相－」（『シンポジウム記録２　国家形成過程の諸変革』　考古学研究会例会委員会編）　2000

7. 今井古墳

所 在 地　中郡峰山町赤坂字今井

調査期間　平成15年7月29日～10月16日

調査面積　約250㎡

はじめに　今回の調査は、主要地方道網野峰山線緊急地方道路整備事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。平成10年度に試掘調査が行われ、6世紀後半の古墳と想定されていた。

調査概要　今回の調査で、丘陵先端部には古墳2基が存在することがわかった。木棺直葬墳の今井下層古墳と、その後に築かれた横穴式石室を主体とする今井古墳である。

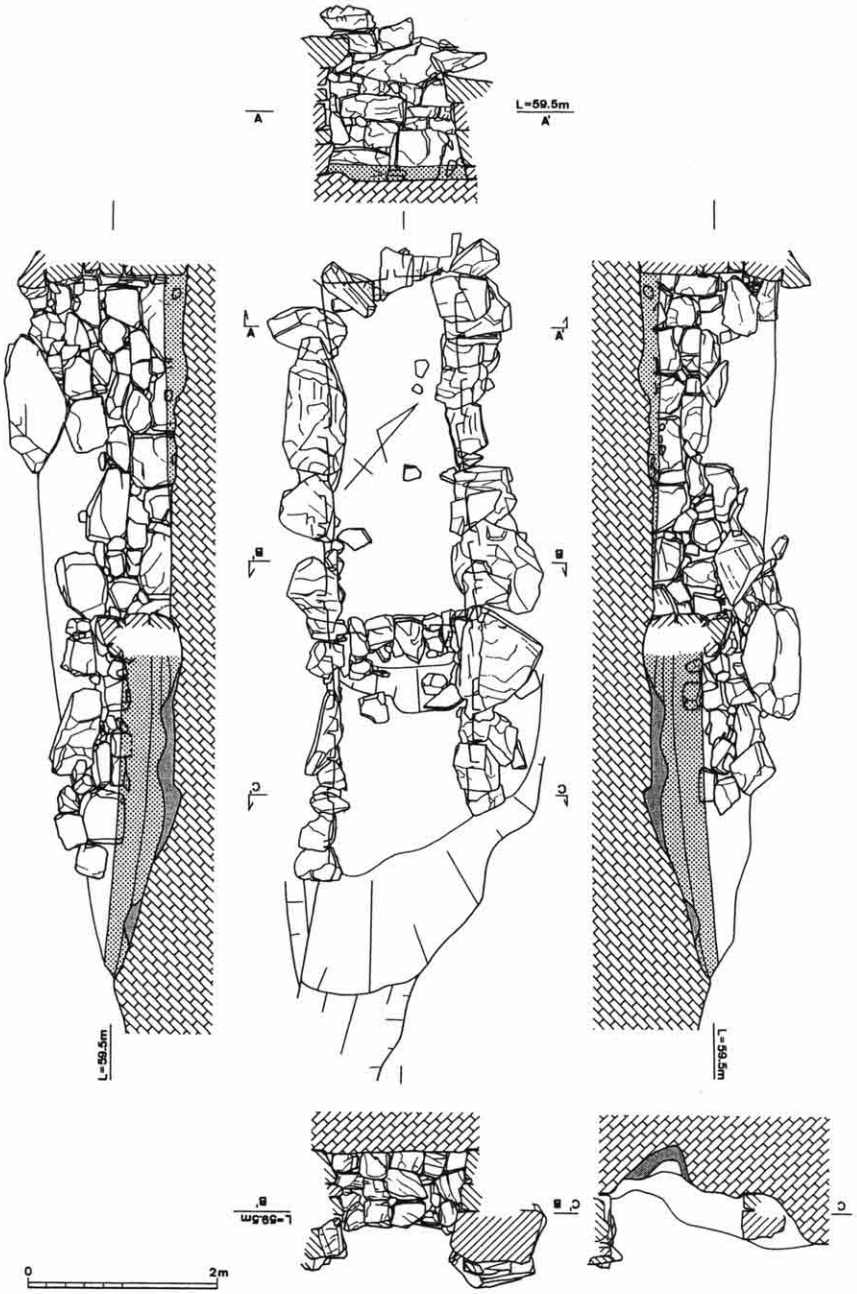
今井下層古墳　今井古墳築造時に大きく削平されていた。周辺の地山のわずかな傾斜変換点から、直径または一辺が12m前後の古墳と思われた。今井古墳の盛土を除去し、地山面を精査した際に、主体部1基を検出した。幅約1.4m、長さ約3.9m、深さ約0.3mを測る。墓壙底から側面にかけて、ゆるやかな丸みを確認したことから、舟底状木棺が使用されたと思われる。墓壙の主軸方位は、N45°Wである。出土遺物がなく、時期については不明である。

今井古墳　直径約12m、高さ約1mを測る円墳である。埋葬施設は、無袖式の横穴式石室で、主軸方位は、N40°Wである。玄室は、奥壁・側壁と、3石ほど積み上げた前壁から構成され竪穴系横口式石室の要素を取り入れた石室であることが判明した。羨道部も、築造時床面が、玄室部にかけてスロープ状に下がり、前壁2石上面まで土を入れ埋葬時床面とするなど、竪穴系横口式石室の要素がある。石室の規模は、奥壁から羨門付近までの長さ約7.5m、幅約1.4m、奥壁から前壁までの玄室長約3.6mを測る。前壁は、基本的に3石積み上げ、その高さは約0.8mを測る。玄室と羨道の床面の高低差は、約0.5mを測る。玄室部の掘形は、横断面が「U」字形で、幅約3.5m、長さ約5.5m、深さ約1.2mであった。羨道部の掘形は、幅約3m、長さ約5mのスロープ状であった。石室に使用された石材は花崗岩で、自然面を多用する。石の組み方は、概ね基底石が縦置きで、2石目からは横置きする。左側壁の一部が玄室内に崩落しており、刀などの副葬品を直

第1図　調査地位置図(国土地理院1/50,000宮津)

撃した形で石材が散乱していた。玄室内床面から主軸方向に平行な２基の棺痕跡が認められた。東側（１号木棺）が0.5×1.6m、西側（２号木棺）が0.5×1.5m、深さ３～５cmを測る。このほか前壁付近に土器群があり、初葬時（推定３号木棺）の副葬品と考える。１号木棺には、杯身・杯蓋・鉄鏃・刀子・刀・小玉、２号木棺には、鉄鏃・耳環が、３号木棺には、杯身・杯蓋・瑯・短頸壺などが副葬されていた。そのほか、羨道床面前壁側から、有蓋高杯２点が出土した。高杯は、脚部を意図的に欠いており、祭祀的意味合いを持つものと考える。墳丘南東側の裾部からは、特殊扁壺が割れた状態で出土し、祭祀後、意図的に割ったと考える。

まとめ　今井古墳は竪穴系横口式石室の要素を取り入れた無袖の横穴式石室で、陶邑編年のＴＫ43～ＴＫ209型式にかけての須恵器が出土したことから、６世紀後半代に築造された古墳であると考える。このような古墳は、京都府内で十数例を数える。その代表的なものとしては、夜久野町流尾古墳、網野町離山古墳、福知山市池の奥４号墳、加悦町入谷西Ａ１号墳、宮津市霧ヶ鼻10・11号墳、弥栄町遠所１・２・27・31号墳・新ヶ尾東10号墳、舞鶴市浦入西２号墳などがあり、無袖の横穴式石室に竪穴系横口式石室の形態を取り入れた例が多い。このうち、今井古墳は、最も横穴式石室の形態を示すと言える。また、今回の調査で出土した特殊扁壺は、隼上がり１号墳・醍醐１号墳・高山12号墳に次いで府内４例目となる。



第２図　今井古墳石室実測図

（岡崎研一）

8．大垣（おおがき）遺跡・一の宮（いちみや）遺跡・難波野条里（なんばの）制遺跡

所 在 地　宮津市大垣・難波野地内

調査期間　平成15年10月15日～平成16年１月20日

調査面積　約800㎡

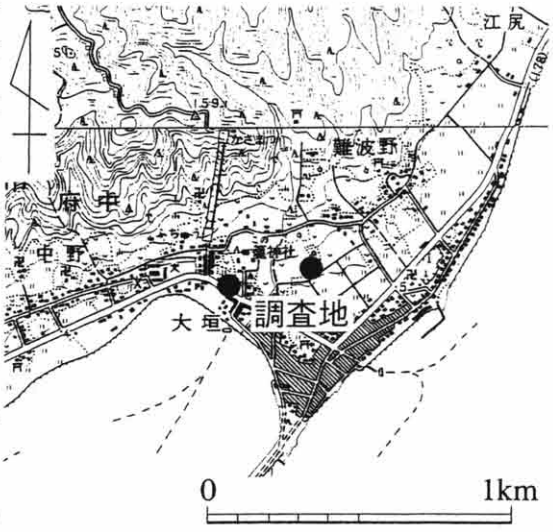
はじめに　この調査は、国道178号線府中道路新設改良事業（通称「府中バイパス」）に先行して、遺跡の実態を把握するために、昨年から継続して行っている試掘および発掘調査である。

大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡は、特別名勝天橋立の北端、成相山系と宮津湾・阿蘇海に挟まれた狭小な平野部に位置する。この地域はかつて府中と呼ばれ、古代丹後の中心地として栄え、雪舟等楊が「天橋立図」に描いたところとして有名である。

調査概要　丹後一ノ宮籠神社周辺の大垣遺跡・一の宮遺跡では、４か所のトレンチを設定した。３か所のトレンチ上層で、江戸時代前期と推定される耕作遺構（畝・溝）を検出した。畝・溝の方向は各トレンチで異なる。２か所のトレンチ下層で、素掘り溝や柱列を検出した。柱列は、溝中で並行するもの、溝に近接するもの、それらとは方向が異なるものなど計４列を確認した。また、溝中の柱には、焼けた痕跡をとどめるものがある。溝の埋土から、16世紀中頃の土師器皿、木製品、渡来銭、松毬などが出土した。包含層からは象嵌木製横櫛、銅製鋲、漆器などが出土した。難波野条里制遺跡では、６か所のトレンチを設定した。府中グランド北側のトレンチでは、堆積砂礫層から大量の古墳時代～中世の土器や渡来銭などが出土した。それより下層の砂礫層にも古墳時代前・中期の土器などを包含する。府中グランド東側のトレンチでは、柱穴群や土坑を検出し、柱穴群周辺から平安時代後期の土器などが出土した。

まとめ　大垣遺跡・一の宮遺跡で検出した素掘り溝の南側は固く締まり道路面の可能性が高く、溝は道路側溝と推定される。溝の方向が国道178号線とほぼ一致することから、現国道は中世の道路位置を踏襲したのであろう。溝中の焼けた柱は、16世紀初頭の一色氏と武田の争乱で被災した可能性が高い。溝中から出土した多数の松毬から、周辺が松林であったと推定され、雪舟が描いた「天橋立図」の情景をうかがえる資料を得た。また、難波野地区から出土した大量の古墳時代～中世の土器は、この遺跡の範囲を検討するための大きな手がかりとなった。

（石尾政信）



調査地位置図（国土地理院1/25,000日置・宮津）

9．岡ノ遺跡第２次

所 在 地　福知山市東岡町～南岡町地先

調査期間　平成15年７月29日～平成16年２月19日

調査面積　約1,785㎡

はじめに　岡ノ遺跡は、福知山市の中心にある南から北にのびる横山丘陵上に立地しており、その先端部には福知山城が築かれている。福知山城石垣調査の際には、天守台の平坦部で、弥生時代の集落跡が確認されている。また、平成４年度には、今回の調査地の隣接地で発掘調査(第１次)が行われており、弥生時代の墓域および古墳・奈良時代～中世にかけての集落遺跡であることが判明している。

今回、国土交通省近畿地方整備局により国道９号線の拡幅計画がなされたことから、事前に調査を実施することとなった。調査地は、下図丘陵の範囲東西約500m内にあたり、西端で標高約42m、東端で標高約27mに立地する。

調査概要　調査は、丘陵の東寄りを中心に約1,550㎡、西端で約250㎡の調査区を設定した。検出した遺構は、弥生時代の住居跡・溝・柱跡、古墳時代の住居跡、平安時代の柱跡・土坑、中世の柱跡、近世の井戸・柱跡などである。

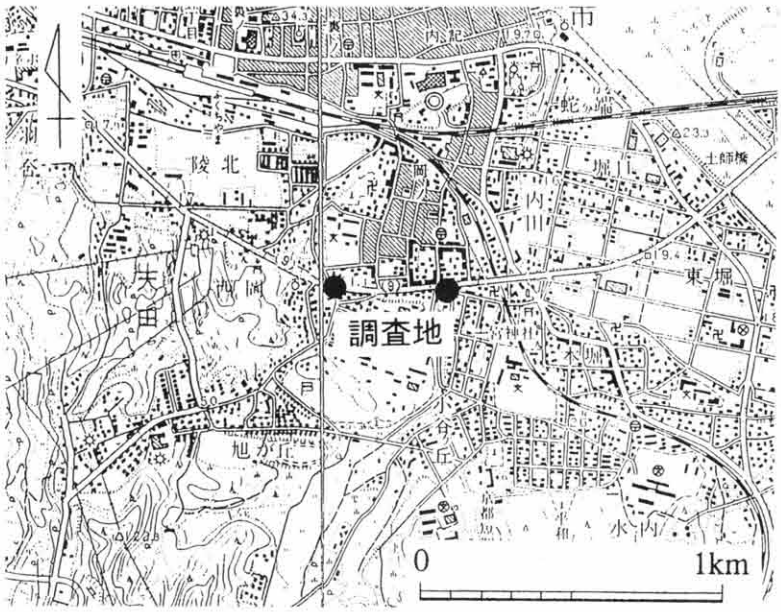
国道の北側では、隣接する第１次調査で検出された弥生時代の方形周溝墓を画する溝ＳＤ02・03と同時期の溝ＳＤ1101や中世・近世の土坑・ピット、近世の井戸を検出した。

国道の南側では、弥生時代の竪穴式住居跡ＳＨ0309や溝ＳＤ0306、古墳時代と考えられる一辺約６ｍ以上を測る竪穴状遺構ＳＸ0401、平安時代の遺物を出土するピット・土坑、近世の井戸・土坑を検出した。

調査地の西端では、弥生時代末～古墳時代初頭にかけての竪穴式住居跡の一部とピット・土坑などを検出した。

まとめ　今回の調査によって丘陵上位でも遺構を検出したことから、調査地全域に遺構が存在することが考えられるようになった。

(戸原和人)



調査地位置図(国土地理院1/25,000福知山市西部・東部)

10. 観音寺遺跡（かんのんじ）

所 在 地　京都府福知山市字観音寺

調査期間　平成15年5月7日～平成15年12月19日

調査面積　約3,000㎡

はじめに　観音寺遺跡の発掘調査は、国土交通省の実施する由良川中流部改修工事の一環で、堤防築造工事に伴い実施した。

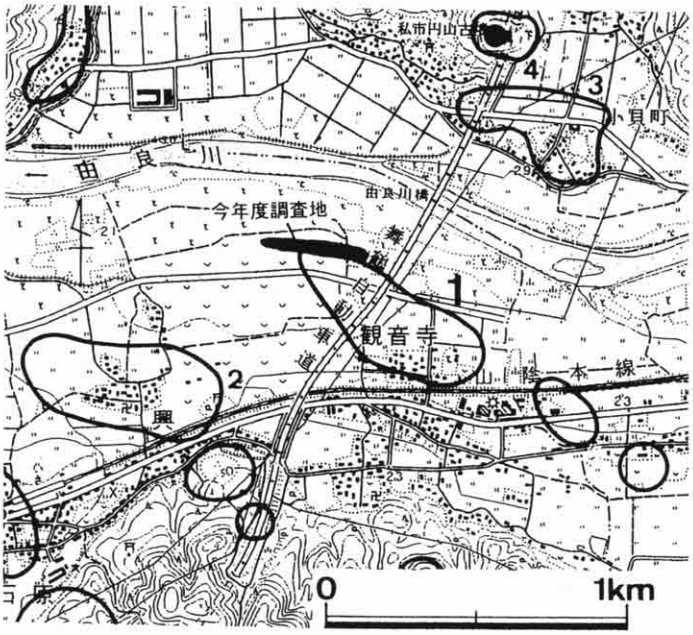
観音寺遺跡は、弥生時代中期から鎌倉時代の集落遺跡として知られる。特に弥生時代中期における集落跡の規模は非常に広範囲に及び、隣接する興遺跡とともに興・観音寺遺跡群とよばれている。今回の調査地は観音寺遺跡の北西側にあたる（第１図）。昨年度の発掘調査で、弥生時代中・後期、さらに古墳時代および鎌倉時代の遺構・遺物が大量に出土した。

今年度は、前回調査地につづくＡ地区西半部と、さらに西側のＢ・Ｃ地区で調査を実施した。ここではＡ・Ｂ地区の調査成果についてふれておきたい。

調査概要

Ａ地区　弥生時代の集落跡のさらなる広がりを確認することができた。まず、調査区東半部では、弥生時代中期および後期の貯蔵穴とみられる多くの土坑や、弥生時代後期の竪穴式住居跡などが見つかった。集落内の居住域であることがうかがえる。

今回検出した遺構のなかで特に注目されるのは、調査区の中ほどを北西から南西方向に弧を描くように掘られた大溝（ＳＤ03071）である。その規模は長さ約38m分、幅約３～5.4m、深さ約１～1.6mを測る（第２図）。溝内からは、弥生時代中期の土器が多数出土した。この溝から西側には、弥生時代の遺構は見つかっておらず、この溝は、集落の周囲をめぐらされた環濠（溝）の一部で、居住域の西側を限るように掘られたものと考えられる。そのほかの遺構としては、平安時代の墓、鎌倉時代の溝・土坑・柱穴などがある。



第１図　調査地位置図（国土地理院1/50,000綾部）
１．観音寺遺跡　２．興遺跡　３．小貝遺跡　４．私市円山古墳

Ｂ地区　Ｂ地区からは弥生時代の溝が多く検出された。これらの溝なかで、方形にめぐるものが中央部にあり、その規模は南北18m、

第２図　Ａ地区溝ＳＤ03071全景（北東から）

第３図　Ｂ地区方形周溝遺構内土器出土状況（北東から）

東西11ｍを測る。弥生時代の墓である方形周溝墓の可能性もあるが、区画内において埋葬主体部を検出していないので方形周溝遺構とした。

溝の東側中間部において、弥生時代中期の壺形土器などが完形で出土した（第３図）。おそらく溝内供献の一例と考えられる。また、方形周溝墓は複数で墓域を形成していることが多く、ここでも同時期の溝が不連続ながらみつかり、周辺に広がる様相をみせている。

また、上層には平安時代の終わりから鎌倉時代にかけての柱穴・土坑・井戸などがある。

まとめ　Ａ地区において、弥生時代中期および後期の溝・土坑、後期の竪穴式住居跡などを検出した。

特に弥生時代中期の溝（ＳＤ03071）は、居住域の西限をめぐる環濠（溝）となる可能性がある。

さらにＢ地区では、溝によって方形に区画された方形周溝遺構が見つかった。南北約18ｍ、東西約11ｍを測る大規模なものである。区画の内外に埋葬主体部は検出されなかったが、溝中から完形の弥生土器の壺などがまとまって出土したことなどから、集落内における墓域と考えられる。

弥生時代中期集落の観音寺遺跡における一居住域の西端と、隣接する墓域の存在を明らかにできたことが今回調査の大きな成果である。

（黒坪一樹）

11. 池上（いけがみ）遺跡第17次

所在地　船井郡八木町池上小字小堤

調査期間　平成15年9月11日～10月30日

調査面積　約200㎡

はじめに　池上遺跡は、亀岡盆地北端に位置する旧石器時代から近世までの複合遺跡である。今回の発掘調査は、独立行政法人緑資源機構による農用地総合整備事業に先立って実施した。

池上遺跡では今回の調査を含め17回の発掘調査が実施された。その結果、弥生～古墳時代の池上遺跡は、亀岡盆地でも有数の大規模遺跡であることが判明した。弥生時代には方形周溝墓60基以上が発見されている。古墳時代の竪穴式住居跡は100基を超え、京都府内でも最も多く竪穴式住居跡が検出された遺跡である。出土遺物には、土器には古墳時代の韓式土器や製塩土器、石器には、弥生時代の粘板岩製の磨製石剣・石庖丁や、その原石が出土している。

調査概要　今回の調査地は、第13次調査の調査区に囲まれた部分を調査したため、当初から竪穴式住居跡や方形周溝墓が検出されることが期待されていた。調査地の基本層序は、整地土の下に旧耕作土、床土、暗褐色土(包含層)、黄褐色土の順で深くなる。遺構検出面は、黄褐色土上面である。今回の調査区は約200㎡と狭小ではあるが、古墳時代の竪穴式住居跡6基や土坑、弥生時代の方形周溝墓や土壙が検出されている。

古墳時代の住居跡は、多くが調査区の南側にのびているため、全体の規模は不明である。また、削平のため一部しか検出できなかったものも含まれる。遺物を伴う住居跡は、概ね6世紀前半のものと考えられる。規模の最も大きいもので、一辺が6.5mである。

弥生時代の方形周溝墓は、10×8mの規模を持ち、出土遺物から弥生時代中期の遺構と考えられる。土壙の中には、完形の壺が検出できた事例も認められる。

まとめ　今回の発掘調査によって、丘陵裾に近い現在の集落の下にも、古墳時代の竪穴式住居跡や、弥生時代の方形周溝墓が拡がっていることが確認できた。弥生時代の墓域の広さに比べ、弥生時代の住居跡の検出例が少ないことから、住居域がこれまで調査した地域以外の近接地に存在した可能性が指摘できる。

調査地位置図(国土地理院1/50,000京都西北部)

(中川和哉)

12. 河原尻（かわらじり）遺跡

所 在 地　亀岡市河原林町河原尻小字井尻ほか

調査期間　平成15年７月３日～平成16年１月29日

調査面積　7.000㎡

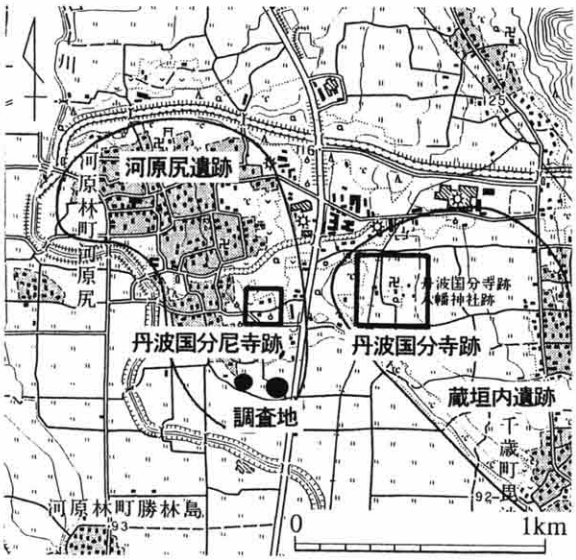
はじめに　河原尻遺跡は、亀岡盆地の中央部、大堰川左岸の沖積地に、東の山塊麓から西に大きく張り出した台地の、先端部を中心に広がる遺跡である。この台地上の中央部には丹波国分寺跡、国分寺跡から西方にやや離れて丹波国分尼寺(御上人林廃寺)跡が存在する。また、周辺には、古墳時代中～後期にかけて天神塚古墳・坊主塚古墳・千歳車塚古墳・保津車塚古墳などの首長墳が築かれている。このような周辺地域の古代の様相から、当地は古代の南丹波地域の中で一つの中心的役割を担っていた地域とみられる。

河原尻遺跡は、過去の亀岡市教育委員会の調査により、丹波国分尼寺跡の下層から竪穴式住居跡などの遺構検出をみたことから、弥生時代～中世にかけての複合集落遺跡であることが知られていたが、詳しい実態については不明であった。

今回の調査は、農林水産省が計画・推進する国営農地再編整備事業「亀岡地区」に伴い、同省近畿農政局の委託を受けて当調査研究センターが実施した。調査地点は、台地の南側裾部、丹波国分尼寺跡の南約200m付近に位置する。京都府教育委員会による事前の試掘調査(平成14年度)の成果をもとに、整備事業で遺構の失われるおそれのある範囲について調査を実施した。

調査概要　試掘調査で遺構の検出をみた田畑を中心に、９か所(第１～９トレンチ)で調査を行った。調査の結果、多数の遺構の検出をみた第６トレンチについては、拡張調査を実施した。

①第１トレンチ　遺構密度はやや希薄である。飛鳥時代の竪穴式住居跡１基、奈良～平安時代の柱穴・溝をわずかに検出した。



第１図　調査地位置図(国土地理院1/25,000亀岡)

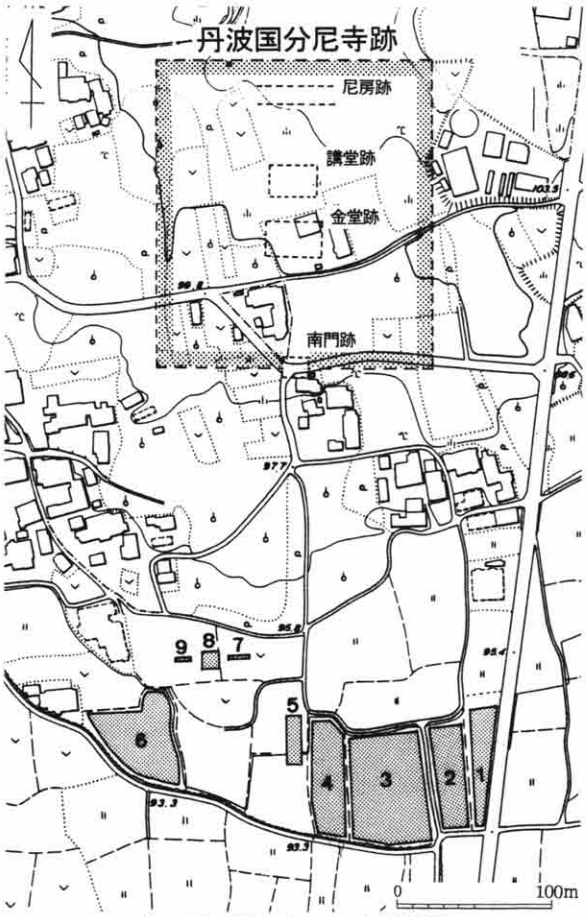
②第２トレンチ　飛鳥時代の竪穴式住居跡７基、奈良時代を中心とする総柱の掘立柱建物跡２棟や多数の柱穴・土坑・溝を検出した。総柱の建物跡は倉庫と考えられ、いずれも大型の方形掘形をもち、３間四方の規模を測る。建物の方位は、北から西に約10°振っている。柱穴の分布状況から、今後の検討によっては、数棟の掘立柱建物の復原が可能であろう。

③第３トレンチ　古墳時代中期～飛鳥時代の竪穴式住居跡15基、奈良時代～中世の掘立柱建物跡３棟のほか、多数の柱穴や土坑・溝

を検出した。

④**第４トレンチ**　北部域でわずかに柱穴を検出したが、中央部以南では遺構はみつからなかった。第３トレンチから一段上がった場所でもあり、後世の開墾で遺構の多くはすでに失われたとみられる。

⑤**第６トレンチ**　古墳時代中期～飛鳥時代の竪穴式住居跡39基、奈良時代～中世にかけての土坑、多数の柱穴を検出した。なかでも竪穴式住居跡の密集度は、今回調査地の中でも群を抜いて高い。また、住居跡の竈の遺存状況が良好な例も多い。特に良好な例では、竈口の左右に立石を配し、竈内の中央に支柱石をもち、住居外に1.5m程のびる煙道を残している。柱穴の分布は調査地全域に及んでおり、今後、数棟の建物跡の復原が可能とみられる。



第２図　調査トレンチ配置図

⑥**第５・７～９トレンチ**　遺構密度の高い第３・６トレンチに挟まれた地点に設けたトレンチであるが、遺構の存在が認められない。第４トレンチと同様に、すでに遺構は失われたものと判断している。

まとめ　今回の調査では、古墳～飛鳥時代の竪穴式住居跡約62基、奈良～平安・中世にかけての掘立柱建物跡・柱穴・土坑・溝などの検出をみた。特に第６トレンチの竪穴式住居跡の密集度の高さは、当時の河原尻遺跡のなかでも、集落の中心であったことを示すとみられる。竪穴式住居跡はすべて方形で、最小例では１辺約2.7m、最大で１辺７ｍを越える住居も認められる。竪穴式住居跡の中には、住居壁周辺の床面上に焼土の堆積がみられる例も多い。主柱穴内に焼土や炭が多量に存在するものもあり、住居解体後に火を受けたと判断される。

今回検出した掘立柱建物跡の多くは奈良時代に属し、丹波国分尼寺造営前後の時期の集落跡でもある。これまでのところ、国分尼寺に関連すると考えられる遺物としては、少量であるが平瓦破片の出土をみただけである。今後の整理作業によって、竪穴式住居跡・掘立柱建物跡の時期を明確にするとともに、河原尻遺跡と丹波国分尼寺との関連性を検討していく必要がある。

（竹原一彦）

13. 高梨（たかなし）遺跡第３次

所 在 地　北桑田郡京北町大字周山小字中山54-2ほか

調査期間　平成15年10月30日～12月12日

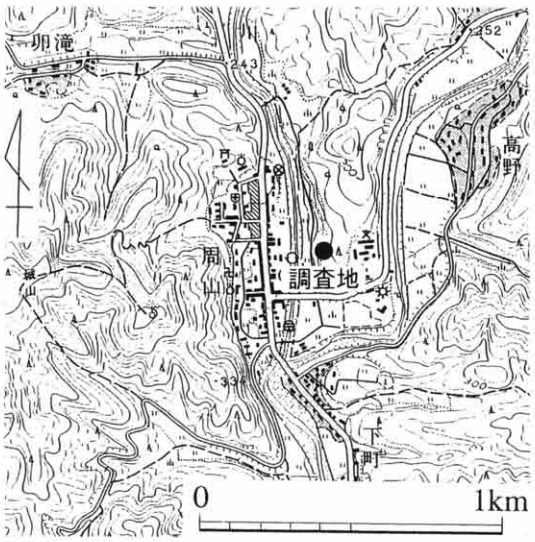
調査面積　約150㎡

はじめに　今回の調査は、高梨遺跡内で一般国道162号道路改良事業が計画されたことを受けて、事前調査として実施したものである。

調査概要　高梨遺跡は、桂川と弓削川の合流部を望む台地上に位置する。この地は、京都から日本海へ向かう道の分岐点として栄え、現在、町の中心地域として賑わいを見せている。

京北町教育委員会が実施した第１次調査により、古墳時代に始まり、飛鳥～平安時代にかけての古代集落遺跡であることが判明している。今回の調査地は、第一次調査が行われた周山中学校グラウンドから北西約80m、第二次調査地の東に隣接する標高約260mの丘陵斜面に位置する。

調査地の基本的層は、上から表土・黒色土・黄色土である。黒色土上層に遺物が多くみられ、黄色土は無遺物の地山である。調査は、遺物包含層である黒色土層の大半を除去し、その後、黄色土上面まで人力により掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。精査の結果、溝・土坑・ピットなどを検出した。これらの遺構の大半は、時期が明らかでなく、性格も不明であるが、一部に奈良時代の須恵器を含むものが認められた。包含層から出土した遺物の大半もこの時期のものであることから、遺構の多くは、第一次調査で検出された奈良時代の集落遺跡との関連をうかがわせるものである。出土遺物の多くは、黒色土上層で出土した。奈良時代の須恵器が主体であるが、縄文時代から近代までの遺物がある。縄文時代の遺物には、サヌカイト製の尖頭器がある。先端部から約８cmが遺存し、基部側が折損して失われているので、全体の形状は明らかでない。縄文時代草創期に製作使用されたものであろう。



調査地位置図（国土地理院1/25,000周山）

まとめ　今回の調査により、以下の二点が明確となった。一つは、高梨遺跡の西側が丘陵斜面に及ぶことが確認され、西側について、遺跡の範囲がより明確となった。もう一つは、遺跡の形成時期についてである。従来、古墳時代以降に形成されたと考えられてきたが、石槍の発見により、縄文時代初期に遡ることが判明した。時期が明らかでない遺構の中に、この時期に形成されたものが含まれる可能性があり、今後、注意が必要である。

（田代　弘）

14. 長岡京跡右京第787次・友岡遺跡

所 在 地　長岡京市梅ヶ丘一丁目73－５番地ほか

調査期間　平成15年10月20日～12月19日

調査面積　約 500㎡

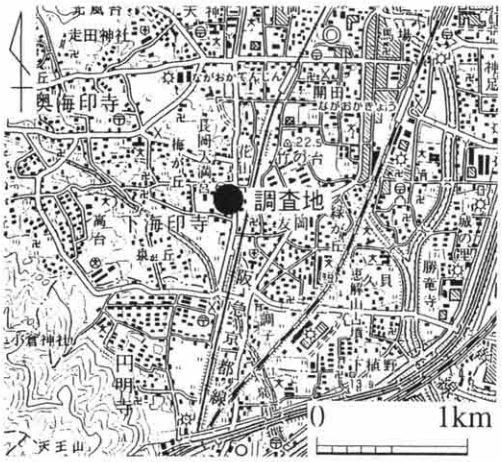
はじめに　今回の発掘調査は、京都府乙訓土木事務所が実施される石見下海印寺線広域幹線アクセス街路整備事業に係わる事前調査である。調査地は、西山山地から派生する丘陵先端(標高30m)の高位段丘上に位置する。長岡京条坊復原案によると右京七条三坊十町にあたり、縄文時代～中世の集落跡である友岡遺跡が広がる。周辺には下海印寺遺跡、友岡廃寺などがあり、過去の調査では調査地のすぐ西側から鎌倉・平安時代の掘立柱建物跡がまとまって発見されている。

調査概要　調査地は、道路拡幅計画線内(長さ200m、幅10m)内に４か所の調査区を設定した。南から順にＡ～Ｄ区と呼び、各調査区で掘立柱建物跡・土坑・溝などを多数検出した。

Ａ地区では調査地全域に多くの柱穴とともに平安～鎌倉時代の掘立柱建物跡の一部を確認した。この建物は、３時期以上に分けられる。土坑は一辺３ｍ、深さ0.35mの方形を呈し、多数の平安時代の土器片が出土した。Ｂ地区では小さな柱穴を検出した。一部東西に３個並ぶものがあるが建物としてまとまらない。時期は鎌倉時代と思われる。Ｃ地区では２間×２間以上に復原できる平安時代の掘立柱建物跡、Ｄ地区では平安～鎌倉時代の掘立柱建物跡のほか、土坑・溝などを検出した。掘立柱建物跡は主軸を南北にもつ建物で平安時代以降のものと思われる。土坑ＳＫ04からは 拳大の礫・瓦器・土師器が出土した。溝は南北に蛇行し、平安時代の遺物が出土した。土坑ＳＫ07からは多くの平安時代の土器類、炭化物が出土した。

まとめ　検出した平安時代前期の土坑、掘立柱建物跡などはほぼ真北方向に揃っている。調査地西側150mでも同じような遺構が確認されており、当調査地までその遺跡の範囲が東へ広がることが分かった。また、鎌倉時代の遺構も検出しており、平安時代と同様の広がりが認められる。調査地西側では「伊賀寺」の地名がある。荘園領主の館跡と推定される地点であり、その関連が考えられる。長岡京跡に関連する遺構は少量の遺物を除き検出できなかった。平安時代前期の遺物が出土する土坑は廃絶した時期を表しているものと思われ、その築造は長岡京期と推察される。過去の10数回の周辺の調査でも遺構・遺物は稀薄であり、この地域の長岡京造営状況については、今後の課題として残る。

(竹井治雄)



調査地位置図(国土地理院1/50,000京都西南部)

15. 内里八丁遺跡第20次

所 在 地　八幡市内里日向堂

調査期間　平成15年４月24日～平成16年２月26日

調査面積　約3,700㎡

はじめに　内里八丁遺跡は、木津川西岸の自然堤防上に位置する、弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。今回の調査は、主要地方道八幡木津線道路新設改良事業に伴い京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。これまでの調査では、弥生時代の水田跡や古墳時代から中世にかけての集落跡などを確認している。また、奈良時代の古山陰道に関係すると考えられる溝なども確認されている。今回は、対象地内に３か所のトレンチを設定して調査を行った。各トレンチで、庄内期から中世に至る各時期の遺構を検出した。また、上奈良遺跡の範囲内にあたる地点で試掘調査を行ったが、遺構は検出できなかった。

調査概要　今回の調査地は、集落跡としての内里八丁遺跡の推定中心地域からは西側寄りの地点にあたる。以下、主な遺構について略述する。

今回検出した最も時期の古い遺構は、庄内期から古墳時代前期頃のもので、溝・竪穴式住居跡・土坑などがある。溝は、幅約6.5m、深さ約1.2mで、ほぼ南北方向にのびる。竪穴式住居跡は一辺約５m前後の方形を呈する。溝の東側に位置する。土坑は、長さ約10m、幅約４mの楕円形状を呈する。溝の西側に隣接する。

８世紀末～９世紀前半頃の遺構としては、井戸・掘立柱建物跡・溝などがある。井戸は、一辺約６mの掘形内に、横板井篭組の方形井戸枠を設ける。井戸枠の内法は、一辺約１mである。この横板材には組立順を示す「南四」などの墨書が残存しているものがある。方形井戸枠内に、さらに円形縦板組の井戸枠を設ける。円形井戸枠は下部を別材の枘で連結する。井戸枠の内法は、径約0.7mである。井戸底部からは銅製黒漆塗帯金具や墨書土師器、緑釉陶器、皇朝銭の「承和昌寳」(835年初鋳)などが出土した。掘立柱建物跡は、３間×３間の総柱建物である。柱跡は一辺約0.6～１mの方形掘形を呈し、柱材や礎盤が残存しているものもある。柱間は南北約２m、東西約1.5mで、全体的には約６×4.5mの規模になる。柱抜痕から８世紀末頃

第１図　調査地位置図(国土地理院1/25,000淀)

第２図　中世墓副葬品出土状況(西から)

の須恵器杯片などが出土した。このほか、「水」と墨書された８世紀末頃の須恵器杯などが出土した溝などがある。

中世の遺構として、火葬墓と考えられる中世墓がある。長さ約1.25m、幅約0.9mの楕円形状土壙内に0.3×0.4mの木箱状の蔵骨器を埋納していたものとみられる。副葬品は、短刀１振・中国製同安窯系青磁椀１個体・瓦器椀４個体・土師皿１枚で、蔵骨器上に置かれていたか、ある程度埋納した上に置いていたものとみられる。副葬品からみて、12世紀末から13世紀初頭頃の墓と考えられる。このほか、瓦器椀や土師皿が多数出土した溝がある。ほぼ東西方向の溝で、幅約0.3mを測る。中世墓とほぼ同時期とみられる。ほかに、12世紀頃の瓦器椀などが出土した素掘りの井戸などが、中世の遺構としてあげられる。

まとめ　今回検出した遺構で、庄内期から古墳時代前期頃にかけての遺構としては、竪穴式住居跡や溝などがあるが、分布状況はまばらであり、調査地の東半部に分布する傾向がみられる。これまでの調査成果を参照しても、今回の調査地は集落の西側縁辺部にあたるものと考えられる。８世紀末から９世紀前半頃にかけての遺構としては、比較的規模の大きい柱穴をもつ掘立柱建物跡やていねいに造られた井戸などがある。それらの遺構出土の遺物の内容からみても、一般の集落に伴うものとは考えにくい。調査地付近には『延喜式』に記された「奈良園」の候補地とみられている上奈良遺跡があり、官衙的な性格も考えられる。

中世墓から出土した同安窯系青磁椀は、現状では、京都府内で唯一の完形での出土例になる。

このほか、７世紀の土坑や溝などの遺構も検出しており、昨年度の第19次調査の成果ともあわせて、調査地付近に長期間にわたる土地利用があったことが窺える。なお、中世以降は、耕作地であったと考えられる。

(引原茂治)

16. 片山（かたやま）遺跡第２次

所 在 地　相楽郡木津町大字木津小字片山・池田

調査期間　平成15年７月23日～平成16年２月24日

調査面積　約1,700㎡

はじめに　今回の調査は、相楽都市計画道路３・２・47号木津駅前東線道路事業に伴い、都市基盤整備公団の依頼を受けて実施したものである。片山遺跡の調査は、木津町教育委員会が、昭和63年度に遺跡全体の試掘調査を実施しており、今回が第２次調査に当たる。

調査概要　調査は、道路建設予定地内の試掘調査を実施し、顕著な遺構・遺物が検出された地点を中心に面的な調査を実施した。木津町教育委員会による試掘調査の成果も参考に、試掘トレンチを計10か所設けた。試掘調査の結果、対象地内の西側約1/4については、湿地上の地形が広がることが確認された。これよりも東側は、粗密はあるものの、遺構・遺物が検出された。

今年度の面的調査は、対象地の東側を中心に実施した（１～３トレンチ）。各トレンチとも、耕作土、床土を除去すると、厚さ10～30cmの遺物包含層がひろがる。この包含層からは、中世の遺物とともに奈良時代の遺物が多数出土した。また、縄文時代ないし弥生時代に位置づけられる石器、剥片類も比較的多く出土した。この包含層を除去し、耕作溝を検出した。概ねこの耕作溝の直下が地山となるが、部分的により下層の包含層が確認できた。中世以前の遺構（下層遺構）は以下の通りである。

１トレンチでは、耕作溝の除去後、縄文時代後期の土器が出土した土坑を１基検出した。２トレンチでは、奈良時代に位置づけられる方形掘形の井戸を１基検出した。一辺2.8m前後、深さ３m以上を測る。出土遺物は少ないが、奈良時代に位置づけられる。このほか、詳細な時期は不明であるが、中世以前に位置づけられる溝や建物跡なども検出した。３トレンチでは、弥生時代後期の竪穴式住居跡や溝などを検出した。

調査地位置図（国土地理院1/25,000奈良）

まとめ　今回の調査では、特に２トレンチで検出された下層遺構は正方位を指向しており、条里地割などとの関連も注目される。さらに、奈良時代の遺物も比較的多数出土しており、調査地周辺に奈良時代の遺跡が広がっていたと考えられる。このほかにも、縄文～弥生時代、中世の遺物が調査地全体から出土しており、各時期の土地利用の一端を明らかにすることができた。

（筒井崇史）

資料紹介

天王山（てんのうざん）古墳群B支群1号墳経塚

森島　康雄・村田　和弘

1．はじめに

天王山古墳群は、熊野郡久美浜町鹿野に所在する古墳群で、久美浜湾に注ぐ佐濃谷川河口部の左岸に位置し、日本海を望む標高約31mの丘陵上に分布している。

古墳群の調査は、平成8・9年度に京都府教育委員会・久美浜町教育委員会・当調査研究センターによって行われ、B支群の調査は当調査研究センターが担当した。(注1)

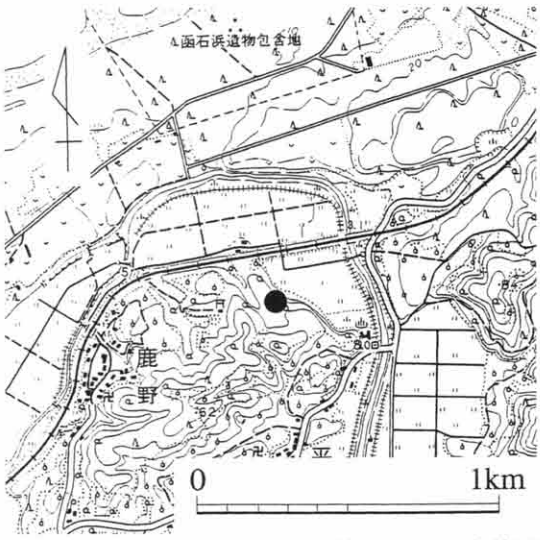
これまでの発掘調査で、A支群で27基、B支群で10基の古墳を確認している。

今回紹介する経塚を検出したB支群1号墳はA支群の東側の丘陵上に位置し、支群内のほかの古墳とは離れた北方に派生する丘陵上に位置する。平成8年度にB支群1・2号墳の試掘調査を実施し、本調査は平成9年度に行うこととなったが、経塚については平成8年度に調査を行った。平成8・9年度の概報では、今回紹介する経塚の詳細は未報告であった。経塚の構造や経筒・外容器の良好な残存状況から、それらの報告の重要性を感じ、以下に紹介することにした。

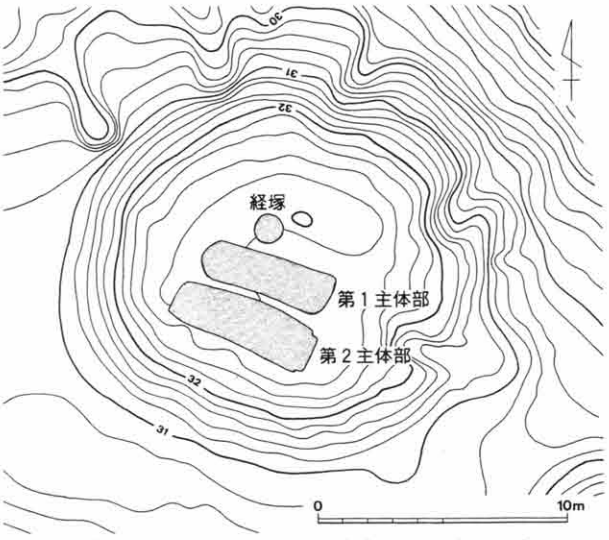
2．経　塚

経塚は第1主体部の北側で検出した。長辺約0.8mの楕円形の土坑内に板石を組んで小石室を設けていた。小石室の側石の一部と天井石の一部の石は抜き取られていた。

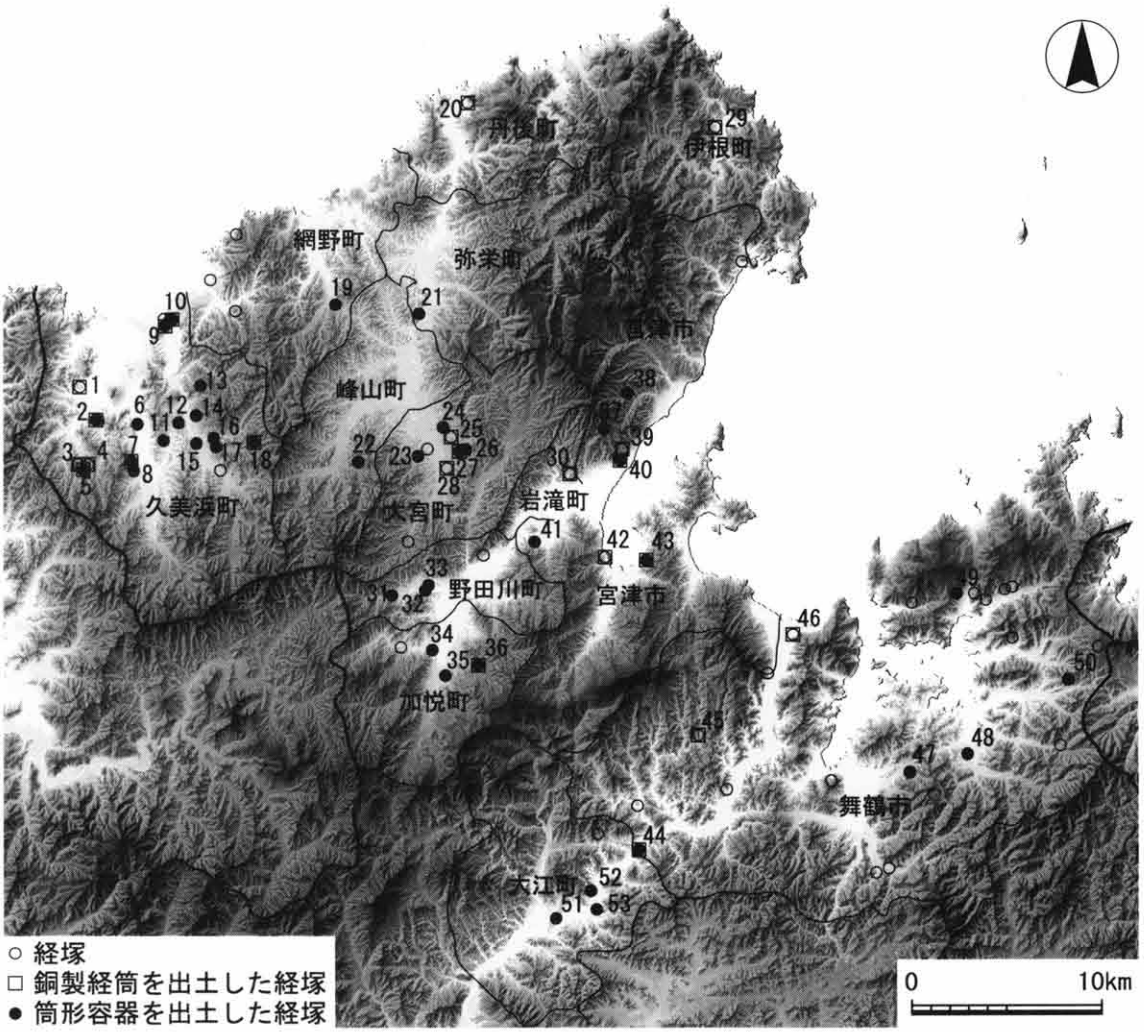
南側の側石は古墳の箱式石棺に使用されているものと同質の凝灰岩の板石が用いられていた。この石材は半円形を呈し、直線に加工された1辺が上側になるように据えられていた。石室内面



第1図　遺跡位置図(国土地理院1/25,000久美浜)



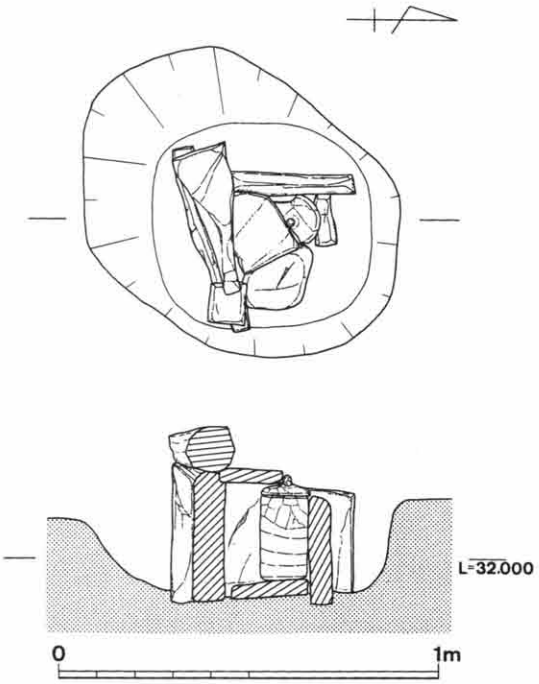
第2図　天王山B－1号墳平面図(1/300)



第３図　丹後の経塚分布図(1/400,000　ベースマップ作成には「カシミール３Ｄ」を使用)
1:如意寺経塚　2:栃谷経塚　3:口三谷経塚　4:汁谷経塚　5:新側経塚　6:海士経塚　7:西明寺経塚　8:権現山遺跡　9:天王山Ａ－19号墳　10:天王山Ｂ－１号墳　11:永留経塚　12:谷垣１号墳　13:山形古墓群　14:薬師遺跡　15:豊谷遺跡　16:蔵谷遺跡　17:蔵谷遺跡　18:円頓寺経塚　19:御堂岡経塚　20:神明山経塚　21:大田南遺跡　22:妙井遺跡　23:通り経塚　24:今市経塚　25:大宮売神社境内社大歳社　26:幾坂経塚　27:左坂経塚　28:三坂神社経塚　29:上野経塚　30:塚ヶ谷経塚　31:雲岩経塚　32:梅谷経塚　33:地蔵山遺跡　34:福井遺跡　35:鏡山古墳　36:大虫神社経塚　37:成相寺古墓Ｃ　38:畑経塚　39:真名井神社経塚　40:籠神社経塚　41:エノク経塚　42:日吉神社経塚　43:河原山経塚　44:二宮経塚　45:下漆原経塚　46:油江経塚　47:天台南谷遺跡　48:妙見山中世墓　49:浄土寺経塚　50:吉坂経塚　51:仲仙１号墳　52:大安寺古墓　53:引地城跡

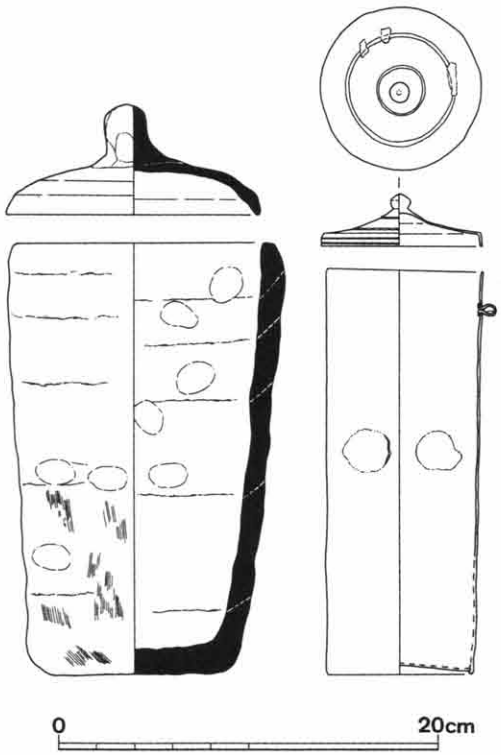
にあたる面には、１条の水平方向の刻線と、それから直角に下にのびる２条の線刻があり、西側の側石が刻線に沿って据えられていることや、もう１条の刻線が東側の側石のあったと思われる位置に刻まれていることから、側石を組む際の目印としていたと思われる。したがって東側は開口していたのではなく、側石が抜き取られたものと判断できる。底にも１石が置かれ、底石上の石室北西隅に接して土師器筒形容器が正置されていた。土師器筒形容器には蓋がされており、中には銅製経筒が納められていた。

（村田和弘）

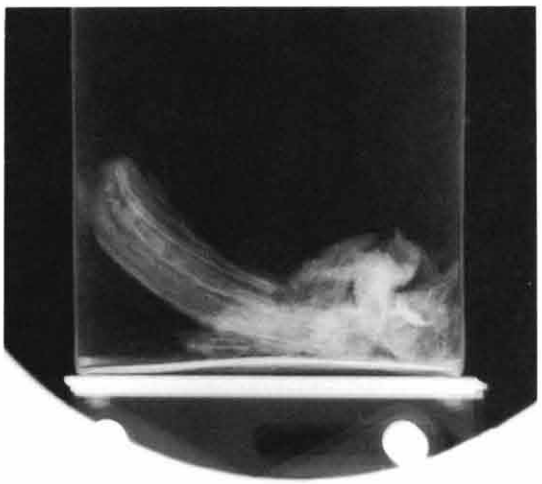


第４図　経塚実測図(1/20)

第６図　出土遺物写真(久美浜町教育委員会所蔵)



第５図　出土遺物実測図



第７図　経筒中性子ラジオグラフィ

3．遺　物

外容器は土師器筒形容器で、総高は28.8cmを測る。筒身は口径12.9cm、高さ22.8cmを測る。粘土紐輪積み成形で、調整が粗いため、内外面ともに粘土の継ぎ目がみられる。内底面には銅鋳経筒の痕跡が明瞭に残っている。蓋は一部を欠損しているが、口径13.4cmを測り、高さ2.7cmの紐を含めると高さ6.0cmを測る。

経筒は総高23.1cmを測る。筒身は鋳造で、口径8.2cm、高さ20.9cmを測り、厚さは約0.1cmである。全体に轆轤ケズリ調整が施され、円形の鋳掛痕跡が１か所みられる。また、筒身上部には穴が開けられ、環が付けられている。保存状態は良好で、一部は金属光沢を残している。底は銅板を嵌め込んで筒身下端を内側に叩き潰して留めている。蓋は鋳造で、口径8.3cmを測り、高さ0.8cmの紐を含めると高さ2.8cmを測る。断面形状は盛蓋で、被せ蓋式である。全体に轆轤ケズリ調整が施され、天井部に２条単位の圏線が２組めぐらされ、被せ部にも２条の圏線がみられる。

保存処理に際してＸ線および中性子ラジオグラフィで撮影を行った[注2]ところ、筒内に経巻状のものが確認され、筒身・底・蓋の内面にも紙片が付着していることから、経巻が納められていたことがわかる。

4．まとめ

管見によると、丹後地域では、これまでに土師器筒形容器が40遺跡から約90点、銅製経筒が22遺跡から46点出土しており、うち10遺跡で両者が伴っている[注3]。これらの中には不時発見などで出土状況がわからず、土師器筒形容器と銅製経筒の関係が明らかでないものもあるが、多くは土師器筒形容器を外容器としており、約半数では紙本経や紙本経とみられる紙片が確認されている。本例は、これに１例を加えるものであるが、発掘調査により、埋納状況が明確にわかる点でも重要である。

（森島康雄）

（もりしま・やすお＝当センター調査第２課調査第１係主任調査員）

（むらた・かずひろ＝当センター調査第２課調査第１係調査員）

注１　ａ．黒坪一樹「天王山古墳群　国営農地（丹後東部・西部地区）関係遺跡平成８年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第76冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1997

ｂ．増田孝彦・岡崎研一「天王山古墳群・別荘古墳群・別荘遺跡　国営農地（丹後東部・西部地区）関係遺跡平成９年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第83冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1998

注２　（財）元興寺文化財研究所で撮影を行った。

注３　天王山Ａ支群19号墳で検出された経塚から出土した銅片は、概報（注１ａ）では銅鏡とされているが、破片の彎曲した状況などからみて、銅経筒の破片の可能性が高い。したがって、この例も10遺跡の中に含めている。

長岡京跡調査だより・88

長岡京連絡協議会の平成15年10月22日と11月26日・12月17日の月例会では、宮内２件、左京域４件、右京域20件の調査が報告された。京域外の７件を併せると合計33件となる。

調査地一覧表(2003年12月末現在)

番号	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第429次	7ANEYT-10	向日市鶏冠井町山畑39-２・３	(財)向日市埋文	10/9～10/17
2	宮内第430次	7ANEHJ-10	向日市鶏冠井町祓所41-15・16・45	(財)向日市埋文	12/8～2/末
3	左京第486次	7ANEHD-5	向日市鶏冠井町七反田１-１	(財)向日市埋文	9/24～12/12
4	左京第487次	7ANFMI-9	向日市上植野町南淀井３-３ほか	(財)向日市埋文	10/28～12/11
5	左京第488次 淀城跡	7ANYIM-1	京都市伏見区淀池上町	(財)京都市埋文研	11/13～1/中
6	左京第489次 淀城跡	7ANYIM-2	京都市伏見区淀池上町	(財)京都市埋文研	11/13～1/中
7	右京第781次	7ANKSM-11	長岡京市開田二丁目・神足二丁目地内	(財)京都府埋文	7/9～1/末
8	右京第782次	7ANNSM-3	長岡京市神足一丁目Ａ３・５・６	(財)長岡京市埋文	8/4～10/2
9	右京第783次 恵解山古墳第４次	7ANQMK-4	長岡京市勝龍寺1207・久貝二丁目813・814	(財)長岡京市埋文	8/11～10/30
10	右京第784次	7ANIHR-7	長岡京市今里三丁目２	(財)長岡京市埋文	8/25～9/30
11	右京第785次	7ANMDB-11	長岡京市神足二丁目地内	(財)長岡京市埋文	9/1～11/5
12	右京第786次	7ANSSR-6	大山崎町字円明寺小字里後14-9	大山崎町教委	8/28～10/10
13	右京第787次	7ANNNM-4	長岡京市梅ヶ丘一丁目73-５ほか	(財)京都府埋文	10/20～12/19
14	右京第788次	7ANIHS-3	長岡京市今里樋ノ尻19-１の一部	(財)長岡京市埋文	10/1～10/6
15	右京第789次 開田城跡第５次	7ANKSC-8	長岡京市天神一丁目313-１・313-４	(財)長岡京市埋文	10/1～11/5
16	右京第790次 開田城跡第６次	7ANKSC-9	長岡京市天神一丁目313-１・313-４ほか	(財)長岡京市埋文	10/6～2/中
17	右京第791次	7ANKSM-12	長岡京市開田二丁目地内	(財)長岡京市埋文	10/14～12/12
18	右京第792次	7ANIHN-5	長岡京市今里二丁目９	(財)長岡京市埋文	10/27～11/10
19	右京第793次	7ANQSE-7	長岡京市久貝二丁目110ほか	(財)長岡京市埋文	11/4～11/13
20	右京第794次	7ANMDB-12	長岡京市神足二丁目地内	(財)長岡京市埋文	11/17～12/16
21	右京第795次	7ANGKS-6	長岡京市井ノ内小西	(財)京都府埋文	11/26～2/末
22	右京第796次	7ANMSM-4	長岡京市神足一丁目地内	(財)長岡京市埋文	11/21～1/末
23	右京第797次	7ANMSM-5	長岡京市神足一丁目330	(財)長岡京市埋文	12/1～1/中
24	右京第798次	7ANMSM-6	長岡京市神足一丁目地内	(財)長岡京市埋文	12/2～1/末

25	右京第799次	7ANNKR-1	長岡京市友岡川原９-１	(財)京都府埋文	12/1～2/末
26	右京第800次	7ANMDB-13	長岡京市神足二丁目地内	(財)長岡京市埋文	12/8～2/中
27	修理式遺跡第７次	3BSBKR-3	向日市寺戸町蔵ノ町５-１ほか	(財)向日市埋文	5/20～10/6
28	修理式遺跡第８次	3NSBSS-5	向日市寺戸町蔵ノ町５-３・修理式10-４	(財)向日市埋文	8/7～10/6
29	中海道遺跡第62次	3NNABK-62	向日市物集女町中海道57-３ほか３筆	(財)向日市埋文	9/3～9/19
30	中海道遺跡第63次	3NNANK-63	向日市物集女町北ノ口25番地の一部	(財)向日市埋文	9/16～9/26
31	大山崎町遺跡確認第52次	7YYMS'ND	大山崎町字大山崎小字西山田	大山崎町教委	10/15～10/30
32	大山崎町遺跡確認第53次	7YYMSTT-2	大山崎町字円明寺小字宝本21-２	大山崎町教委	11/26～12/10
33	山城国府跡第68次	7XYS'TH-7	大山崎町字大山崎小字高橋12の一部	大山崎町教委	10/16～11/3

長岡京跡発掘調査抄報

宮域　朝堂院西四堂の西に隣接する宮内第429次では、地鎮祭跡と考えられた区画の東限施設の南側延長を追及したが、溝と杭列からなる囲画施設は確認されなかった。ただ、宮造営に係る厚さ１ｍ程の入念な整地の状況を示す情報が得られた。また、大極殿前庭部において確認されていた宝幢遺構の西側延長部の確認調査(宮域第430次)が開始され、「玄武」「白虎」を示す表象施設の兆候が明らかになりつつあり、今後の調査に期待される。

左京域　左京第486次は、離宮的な性格をもつ左京二条二坊十町の南東部にあたり、これに面する二条条間大路と東二坊坊間小路の路面側溝の検出(前者が優先関係にある)により、二条条間大路の路幅が25.3ｍ(溝心々間)であることが判明した。また、この南側溝を埋める際に、須恵器杯や多くの土師器杯・皿類などの食器類８点や土錘14点・土鈴１点を整然と折敷内に納めた特殊な埋納行為を示す資料が得られた。

右京域　京域で進行中の調査の多くは右京域に分布している。ＪＲ長岡京駅周辺では、駅前再開発や府道の拡幅などにより、小範囲ながら各所で調査が行われている。成果の見通しのついたものを例示すると、右京第785次では、柱穴規模の大きな長岡京期の南庇を備えた東西棟の掘立柱建物跡や弥生時代の円形竪穴式住居跡・方形周溝墓・広範に展開する流路状溝など、中核集落である神足遺跡に関連する遺構が検出された。前者は、周囲で確認されている建物遺構と同様に、京条坊線に対し建物主軸がやや西に振れており、この地区の宅地内の造営方位の特殊性を示す資料をさらに追加するものである。神足遺跡の西域を南北に縦断するように調査した右京第781次では、中世前期の方形居館の東を限る堀とみられる幅約３ｍの大溝を、南東隅の屈折部も含め延長130ｍにわたり確認した。この調査では、ほかに長岡京期と中世の掘立柱建物跡や井戸・溝などを検出しているほか、『東院』所用瓦や形象埴輪などの出土が留意される。

(伊賀高弘)

センターの動向(03.11～04.01)

1．できごと

11．10　三日市遺跡(亀岡市)発掘調査開始

11～14　埋蔵文化財発掘技術者専門研修「遺跡地図情報課程」(於：独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所)引原茂治主任調査員参加

13　教育庁職員行政・人権問題研修(於：京都市)久保哲正調査第1課長、小山雅人調査第2課総括調査員、水谷壽克調査第1課課長補佐、奥村清一郎調査第2課課長補佐、杉江昌乃総務係長、伊野近富調査第2係長、石井清司調査第3係長、辻本和美資料係長、森島康雄・中川和哉主任調査員、今村正寿主任、岡崎研一専門調査員、柴暁彦・筒井崇史調査員出席

河原尻遺跡(亀岡市)現地説明会

14　教育庁職員行政・人権問題研修(於：京都市)長谷川達調査第2課長、松井忠春・竹原一彦・増田孝彦・戸原和人・小池寛・岩松保・田代弘・細川康晴主任調査員、竹井治雄・石尾政信・黒坪一樹専門調査員、伊賀高弘主査調査員、石崎善久・野島永・高野陽子・村田和弘調査員、関浩治主査、鍋田幸世主事出席

京都人権啓発行政連絡協議会人権研修(於：京都市)安田正人総務課長出席

17　教育庁役付職員人権問題研修Ⅱ(於：京都市)安田正人総務課長、引原茂治主任調査員出席

21　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック事務担当者会議(於：京都市)杉江昌乃総務係長、今村正寿主任、鍋田幸世主事出席

25　出土文化財整理・台帳作成事業開始

26　長岡京跡右京第795次・井ノ内遺跡(長岡京市)発掘調査開始

長岡京連絡協議会(於：当センター)

27　教育庁役付職員人権問題研修Ⅲ(於：京都市)田中彰主任調査員出席

12．1　長岡京跡右京第799次(長岡京市)発掘調査開始

9　第69回役員会・理事会(於：ルビノ京都堀川)上田正昭理事長、中谷雅治常務理事・事務局長、中尾芳治、井上満郎、都出比呂志、高橋誠一、上原真人、杉原和雄各理事出席

12　高梨遺跡(京北町)発掘調査終了(10.30～)

16　長岡京跡右京第787次・友岡遺跡(長岡京市)関係者説明会

17　観音寺遺跡(福知山市)現地説明会

長岡京連絡協議会(於：当センター)

19　観音寺遺跡、発掘調査終了(5．7～)

長岡京跡右京第787次・友岡遺跡(長岡京市)発掘調査終了(10.20～)

1．6　西ノ口遺跡(山城町)発掘調査開始

9　薪遺跡第５次(京田辺市)発掘調査開始

14～23　埋蔵文化財発掘技術者専門研修「報告書作成課程」(於：独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所)野島永調査員参加

16　案察使遺跡(亀岡市)発掘調査開始

20　大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡(宮津市)発掘調査終了(9.15～)

21　園部城跡(園部町)発掘調査開始

26　時塚遺跡(亀岡市)発掘調査開始

27　長岡京跡右京第781次・神足遺跡(長岡京市)関係者説明会

28　長岡京連絡協議会(於：当センター)

29　長岡京跡右京第781次・神足遺跡、発掘調査終了(7．9～)

河原尻遺跡(亀岡市)発掘調査終了(7．3～)

編集後記

平成16年もほぼ1/4を過ぎようとしています。月日の経つのは早いですね。

15年度の最終号となる第91号をお送りします。

今号では、弥生時代の墳墓としては最大級で、全国的に話題となった赤坂今井墳丘墓を中心に、丹後における弥生墳墓の祭祀にスポットを当てた石崎善久氏の論考を掲載しました。

ご味読いただくともに、今後の作業の進展にご期待下さい。

（編集担当＝辻本和美）

京都府埋蔵文化財情報 第91号

平成16年3月26日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　三星商事印刷株式会社

〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961 (代)

『京都府埋蔵文化財情報』第91号正誤表

頁	場所	誤	正
5	10行目	．鉄器供献、	d．鉄器供献、
17	第１図の縮尺率	1/50,000	1/25,000
20	４行目	7.000㎡	7,000㎡
20	第１図	国土地理院地形図1/25,000亀岡に加筆して使用。縮尺率約1/30,000	
21	13行目	竈内	竈内
22	10・17行目	第一次調査	第１次調査
24	下から14行目	井篭組	井籠組